

〈研究ノート〉

一柳満喜子の生涯に関する一考察

平松隆 円

I はじめに

一柳満喜子（以下、満喜子）は、明治、大正、昭和を生きたクリスチャンであり、教育者である。特に、幼児のために、多くの実践をおこなった。満喜子によって設立された学校は、今日も保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校までも有する近江兄弟社学園として存続している。

満喜子による教育事業について、夫の一柳米来留（William Merrill Vorles; 以下、メレル）は次のように語る。

教育事業は、満喜子の創意にかかるものであった。満喜子は新しい方法を紹介し、生徒ばかりではなく、教師も訓練の対象としている⁽¹⁾。

メレルは、一九〇五年に滋賀県立商業学校（現在の滋賀県立

八幡商業高等学校）の英語教師として来日して以降、彼とその教え子である吉田悦蔵、村田幸一郎とともに近江ミッション（現在の近江兄弟社・以下、近江兄弟社）を設立し、建築家、伝道家、実業家として活躍した。その近江兄弟社での教育事業の中心を担っていたのは、メレルではなく満喜子であった。しかしながら、これまでメレルに関する研究は数多くおこな



撮影年月不明：『教育随想：初版』

われてきたものの、満喜子についての研究はほとんどない。

満喜子は、自らすすんでものを書くことをせず、依頼による講演や執筆が多く、満喜子を知る史料はほとんど残っていない。断片的ではあるものの、学校通信などの満喜子による文章の一部が一九五九年と一九七二年に文集としてまとめられているが、多くが未整理あるいは行方不明となっている。

また、華族出身でありながら、満喜子に関する公文書の一切が宮内庁や霞会館に現存していない。さらに、一柳家の系譜がまとめられている『一柳家史紀要』にも、満喜子の名前は登場しない。

伝記に類するものとしては、満喜子自身の手による『教育随想』所収の「辿り来し道をふりかえりて」やグレイス・フレッチャー (Grace Nies Fletcher) の『The Bridge of Love』(アメリカでの書名、イギリスでは『Love is the Bridge』)がある。

「辿り来し道をふりかえりて」は、満喜子が自分自身について語った唯一の文章である。また、『The Bridge of Love』は、ボストンのジャーナリストであったグレイス・フレッチャーが一九六六年四月五日に来日、約一ヶ月にわたり一柳邸に滞在し満喜子本人からの直接取材を含めて関係者からメレルと満喜子について取材し、執筆している。グレイス・フレッチャーが執筆に取り組むこととなったのは、一九六五年に満喜子が渡米し、十一月十六日にニューヨークの出版社E.P. Dutton & Co., INCを訪れた際、「メレルの生涯は誰かに書かせ、広く読ませねば

ならない」と出版社がグレイス・フレッチャーを満喜子に紹介したことによる。

主にメレルに関する内容で大半が占められているものの、日本国内での出版が前提ではなかったためか、満喜子の生家での出来事をはじめ、近江兄弟社関係の出版物、また講演などで語られることのなかった極めて私的な内容も記されている。『The Bridge of Love』はこれまで一度も日本語に翻訳されることはなかったが、現在、平松隆円を中心に翻訳出版の準備がすすめられている。

新制学校制度になってからの高校第三期卒業生たちが、『忘れられない教育者一柳満喜子先生の思い出「満喜子先生ありがとう」』を二〇〇六年に出版している。ここでは、第三期卒業生たちが満喜子の思い出をつづっており、断片的に語られるのみであった学校での満喜子の姿を知ろうと貴重な史料といえる。

②
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱
⑲
⑳
㉑
㉒
㉓
㉔
㉕
㉖
㉗
㉘
㉙
㉚
㉛
㉜
㉝
㉞
㉟
㊱
㊲
㊳
㊴
㊵
㊶
㊷
㊸
㊹
㊺
㊻
㊼
㊽
㊾
㊿

②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱
⑲
⑳
㉑
㉒
㉓
㉔
㉕
㉖
㉗
㉘
㉙
㉚
㉛
㉜
㉝
㉞
㉟
㊱
㊲
㊳
㊴
㊵
㊶
㊷
㊸
㊹
㊺
㊻
㊼
㊽
㊾
㊿

戦前、満喜子に接していた吉田悦蔵はその著書、『近江の兄弟ヴォーリス等』のなかで満喜子について、何も書き残していない。

満喜子についての研究報告は、佐野安仁の「一柳満喜子の教

育観」・石井紀子の「Constructing Christian Brotherhood: Makiko Hitotsuyanagi Vorices and Her American Mentors」奥村直彦の「ヴォーリズ夫妻の教育思想と「近江ミッション」教育事業の展開」のみである。

佐野安仁は『教育随想』を史料に満喜子の教育観を論じ、石井紀子は日米女性文化交流の立場から満喜子とメレルの国際結婚を題材にキリスト教とジェンダーについてまとめ、奥村直彦は主としてメレルに関心を置きながら、『The Bridge of Love』を史料にヴォーリズとの関係のなかで部分的に満喜子を取り上げる程度である。ゆえに、いずれも満喜子に関する総合的な研究とはいえない。

このように、研究がほとんどおこなわれてこなかったこともあって、満喜子については、なお不明な点が多い。

そのため、現在の近江兄弟社学園においてさえ、その創立者が満喜子であるにもかかわらず、事実と異なる言説もみられる。

満喜子先生が教育の責任者として君臨され、学園幹部はそれに忠実な方々で固められていましたから、いわば満喜子先生オンリーの考え方で…(中略)…一九九〇年ごろから意図的に学園創立者はヴォーリズ夫妻という風に表現して来ましたが、今でも学園創立者・一柳満喜子という表現が処々に見られます。ヴォーリズ百年を機に、ヴォーリズさ

んの研究をすすめ、ヴォーリズ精神を学園創立理念としてきっちり位置付ける⁽³⁾

だが、メレルは教育事業には深く関わらなかった。メレルに代わって、教育事業を担ったのが満喜子である。

ヴォーリズのミッションで、一番の欠点は、教育事業のな⁽⁴⁾いことである

賀川豊彦は、一九二三年の時点ではつきりメレルが教育事業をおこなってこなかったことを指摘している。

ミセス・ヴォーリズも聡明な人である。然し私は彼女のこと⁽⁵⁾に就てあまり知らない

また、賀川豊彦は満喜子について「聡明」とだけ記し、詳しくは語らなかった。

満喜子に関する研究は、たんに一人の女性の生涯を検証するにとどまるものではない。近江ミッションにおける教育事業はもちろんのこと、メレルの人的交流における満喜子の役割など、これまでのメレル研究では検討されてこなかった領域における新たな知見の提供が可能となる。一般的には、メレルが日本の建築や戦後の天皇制に影響を与えたといわれている。しかしな

がら、メレルの事業を人的にも経済的にも支えていたのは、満喜子にほかならない。その意味において、満喜子について検討をおこなうことは重要である。

そこで、本研究では満喜子の生涯について、特に彼女が近江兄弟社で担った教育事業に焦点を当てて概観し、満喜子研究だけではなく新たなメレル研究への萌芽としたい。

II 一柳末徳の娘として

一八八四年三月十七日。慶應義塾で英学を学び、のちに子爵として貴族院議員となる一柳末徳（以下、末徳）を父に、女三従の徳を教えられ婦徳を全うすることを理想とする栄子を母に、東京芝の愛宕下佐久間町（現在の東京都港区西新橋一丁目）で満喜子はこの世に生を享けた。

末徳は九鬼隆都の五男であり、播磨小野藩の第十一代の藩主であった一柳末彦の養嗣子となって一八六三年六月九日、末彦の隠居により家督を継いだ。従二位、対馬守であり、帝国博物館員も務めた。また栄子は、伊予松本藩第八代藩主の一柳頼紹の娘であった。

末徳には正妻である栄子とのあいだに四人（男三人、女一人）と、三人の妾とのあいだに三人（女三人）の子がいた。むろんこれは、家督継承者を絶やささないという意味では、天皇家に側

室があつたように、華族の家に妾がいることは珍しくない。たとえ、現実には妾の子であつたとしても、戸籍に記載された一柳家の子であることには間違いない。だが「辿り来し道をふりかえりて」によると、長じた満喜子は、このような家庭のあり方を「乱れた」と感じていたようだ。

しかしながら、栄子自身は疎ましく思うことなく、夫を愛するよう努力した。それは、妾は奉公人であり、妾が何人いてもそれを統制し、服従させて家を平和に治めるという典型的な武家の妻の姿でもあつた。長女である妾の娘が十一歳でジュリア・カルロゾルス (Julia Carrothers) が東京築地の外国人居留地に設立したミッションスクールであるA六番女学校に入学しても、菓子折りを携えてよく寮を訪れるほどだった。このミッションスクールの訪問が、後に栄子をキリスト教へと導くことになるのである。

父は、聖書を読んでいましたので、キリスト教のよさは理解していました。自分の改変は、まず棚にあげ、女子にはよい教と考え、妻がキリスト教に帰依することを許しました⁽⁶⁾

満喜子は、末徳が聖書を読む姿をみていたのだろう。そのため、末徳がキリスト教のよさを理解していたと回想している。たしかに、末徳は慶應義塾で、アメリカの医師であり宣教師で



満喜子6歳、姉の喜久子(左)：The Bridge of Love

あつたヘボン (James Curtis Hepburn) やオランダの法学者であり神学者であつたフルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeke) から欧米文化を学ぶ機会をえていた。また、末徳の実の兄である九鬼隆義が、一八八七年に洗礼を受けクリスチャンとなつているなど、キリスト教に接する機会があつたであろうことは間違いないが、どの程度理解していたかは不明である。

明治の初頭は欧化主義の訪れとともに、上層階級の者たちがキリスト教に傾倒していつた時期である。東京は近代国家体制の整備にともない、キリスト教が広まつていた。末徳は、上層階級へのキリスト教の広まりのなかで、知識としてキリスト教を知つていただけなのかもしれない。だが、栄子がキリスト教に帰依したいという願いを末徳に出したとき、これを許した。

一八七七年十月、栄子は長老派芝露月教会で洗礼を受け、クリスチャンとなつた。年月は不明であるが、皇后に謁見を許さ

れたとき、白無垢を着て聖書を献納したという。

栄子にとって婦徳を全うすることの実現は、キリスト教の隣人愛の教えと重なり、妻たちに対して疎んずるところか一層、妻たちをしつけ、その子らを我が子のごとく愛するように行動させた。

だが、ひたすら家庭円満をはかる栄子とは対照的に、末徳は妾におぼれ、栄子に理不尽な怒りをぶつけ、ときにはみるに忍びない傷を栄子の身体に残した。

心づかなかつた淋しさが急に込あげてきて、一時は、母の埋められた土のなかに自分もともに入るよりほかに逃れ道のない思ひになりました⁽⁷⁾

そして栄子は、満喜子が九歳の一八九五年秋に長い病床の生活の後、この世を去るのである。満喜子は、このような家庭のなかで、生まれ育つた。

妾の子らがミッションスクールに通つたように、満喜子もまた同様の学びの機会をえる。一八八九年、五歳になつた満喜子はミッション幼稚園に入園した。ここでは、英語の歌を歌い、リズム遊びやリズム劇、折り紙、刺し紙、張り紙、縫いとりが行われていた。特に、この縫いとりが、満喜子のお気に入りだつた。

二年にわたる幼稚園のあと、女子高等師範学校附属小学校へ

入学し四年間学び、さらに同附属女学校へとすすんだ。

家の経済力と私自身の願いにより、適当な理由を申し出て旧宮内省に不参加の許可願を出してお断り申した⁽⁸⁾

本来、子爵一柳家の子女であれば、学習院女子部の前身である華族女学校にすすむべきところであった。しかし満喜子は、華族女学校には行かず、官立学校があるお茶の水に通った。一柳家の経済状況は、末徳の浪費で東京の邸宅の処分を考えなくてはいけないほどであった。なお、宮内庁書陵部で調査したところ、この「不参加の許可願」は現存していない。

六年間の附属女学校在学中に満喜子は、中村五六が主事をしていた附属幼稚園を度々見学している。

中村五六は、女子高等師範学校教授兼附属幼稚園主事として、日本の幼稚園教育の指導的立場にあり、『幼児教育法』などを残した日本の幼児教育の実践における先駆者の一人である。そんな環境のなかで青春時代を過ごした満喜子は、知らず知らずのうちに幼児教育の素養を身につけたのかもしれない。

幼稚園と藤棚はつきものという印象⁽⁹⁾

さて、満喜子は度重なる幼稚園の見学のなかで、園舎に大きな藤棚があることに感動している。その感動によるものなのか、

後に、満喜子は自らが近江兄弟社ではじめた幼稚園でも大きな藤棚をつくっている。

女学校修了後は、二ヶ年の補習科で和裁を学び、音楽と英語に強い関心をもっていたため、補習科卒業後も再度ミッシェンスクールに入学し、音楽と英語の勉強を続けている。

だが、満喜子の青春は子爵令嬢としての優雅な毎日でも、希望に満ちた学業の毎日でもなかった。母栄子の亡くなってから、家事や妹の勉強の世話などが満喜子の役割となった。

誰ひとり待っていてくれる人も、心配してくれる人もなく、私はだまって夕食の膳に向う⁽¹⁰⁾

そんな日々が、多くの妾とともに住む母亡き家で過ぎ、居心地の良いものではなかった。学校からの帰宅が遅くなっても心配してくれるものは誰もいなかったという。

父のもとにいました時の生活は、ほんとうに愛のない淋しいながいながい間⁽¹¹⁾

母亡き家は、ただの調法者として扱われる愛のない寂しい時間⁽¹²⁾に満ちた場⁽¹³⁾でしかなかった。

満喜子と末徳とのあいだには、深い確執があったといわれる。それは、末徳が栄子に暴力的であったことに端を発しているの

ではない。満喜子の世話係であったナツが、末徳の三番目の妾となったことに、大きな原因があると考えられる。

いずれにしても、このような家での生活は、満喜子にとって辛いものであったのだろう。そのため、末徳が東京から明石の邸宅に移るのにあわせ、満喜子は十九歳の一九〇三年、三番目の兄恵三の養子先である廣岡家に家庭教師として奉公にでるという理由で、家を離れた。

廣岡家は大阪の豪商加島屋の一族であったが、幕府崩壊にもなう大名貸しの返済の滞りにより大きな負債をかかえていた。満喜子が廣岡家に赴いたのは、廣岡浅子（以下、浅子）により家業が立ち直り、一人娘のかめ子のもとに恵三が婿養子となった直後である。

なお、浅子は三井家の出身であり、成瀬仁蔵らとともに一九〇一年に日本女子大学の設立に尽力し、一九一一年にはクリスチャンとなっている。

恵三のもとでの生活は、満喜子にとって、実家での生活に比べれば愛をもって迎え入れてくれる心安らかな場であった。廣岡家には、タエ、ヤエ、サエという三歳から五歳の年子の娘がいたが、満喜子の仕事はこの姪たちの世話であった。

一人ひとりについていた守りを解雇、一人だけ自分の助手として残し、三人が自分同士で楽しむように¹²⁾

姪たち一人ひとりについていた世話係のうち、一人だけ満喜子の助手として残し、そのほかは解雇してしまう。そして、三人が自分たちだけで楽しむことができるように導いた。その結果、それまで歯磨き、着衣脱衣、食事の膳の準備と後片付け、遊具の後片付けを自分たちではできなかったのが、できるようになった。

自分専属の世話係がすべて身の回りのことをしてくれていた状態から、自分がしなくてはならなくなった状態への変化は、姪たちにとっては生活訓練であり、満喜子にとっては幼児の自主性の発見であった。この実験が、後年の幼稚園教育の大きな土台となる。

一九〇六年、神戸女学院に設置されたばかりの音楽部ピアノ科に満喜子は入学している。

神戸女学院で学ぶことができたのは、末徳の女子教育への高い関心と理解があったからだろう。末徳は、私生活は酒と女性によって乱れていたが、子どもたちの教育には遺漏がなかった。自分の子どもたちが学ぶ学校で父兄会があるときには、必ず参加したという。

神戸女学院は、一八七三年のアメリカ伝道会派遣のエライザ・タルカット (Eliza Talcott)、ジュリア・ダッドレー (Julia Dudley) 両宣教師が神戸に私塾を開いたことにはじまる。そして、一八七五年にそれが発展し設立された女子寄宿学校、通称「神戸ホーム」の設立に尽力した人物に、福沢諭吉と深い



満喜子24歳：『教育のこころみ』

交流があり摂津三田藩最後の藩主であった九鬼隆義がいる。満喜子の父末徳の兄である。このような縁からも、満喜子は神戸女学院で学ぶことができたと考えられる。

神戸女学院音楽部ピアノ科の第一期生として、一九〇八年にたった一人の卒業生となった満喜子は、その後、日本女子大学校に助手として半ば学生、半ば教師のような形で勤めることになる。この日本女子大学校との縁は、浅子の力添えがあったからだろう。

III 思いがけない渡米

女子高等師範学校附属女学校、神戸女学院音楽部へとすすみ、日本女子大学校の助手となるという高い学歴が災いしてか、そ

れともミッシェンスクールで学んだキリストの教えや妾を多く抱える家での母をみて育ったことの影響か、二十四歳になった満喜子のもとには縁談が舞い込んでも、まともになかった。いや、満喜子に結婚する気がなかった。

自分の世話係であったナツが父の妾となった五歳のとき、男性はみな父のようであると、生涯結婚しないことを決心したという。

そんな満喜子の幼いときからの決心を知るよしもない周囲は、満喜子にアメリカへの留学をすすめる。婚期が遅れている娘をもつ家の体裁をつくらうためと、アメリカに留学する寂しさから、現地にいる日本人と結婚するのではないかという思惑があったらしい。

アメリカへの留学は、満喜子にとっては、願ってもない話であった。友人のアーネスト・クレメント (Ernest Clement) 夫人を頼りに、一九〇九年七月にアメリカへと旅立った。

アーネスト・クレメントとは、バプテスト派の宣教師であり、一八九五年に東京築地の東京中院開設に関わり校長に就任、また旧制第一高等学校で教鞭をとっていた人物であり、『*Miho Samurui and British Sailors in 1824*』などの著作を残している。

準備もままならないうちの旅立ちであったが、満喜子はクレメント夫人によりハワイのオアフ・カレッジ (Oahu College) 学長夫妻を紹介されており、当初、ハワイに留学する予定であ



アメリカ留学時代：『教育のこころみ』

ったのだろう。しかしながら、アメリカへ向かう船の旅が満喜子のその後の人生への転機となる。

同船のアメリカ紳士五名が、この小さい日本女性のために頭を寄せて相談し、そのなかの一人で、夫人同伴だった人が口を聞いて私を呼び、もし私たちを信用なさるならば、切角アメリカに勉強をしようとするあなたを無名の大学でない、東部一流の大学に案内したい”⁽¹³⁾

その船中で出会ったアメリカ人が、満喜子の学歴と社会的地位を考慮してプリンモアカレッジ (Bryn Mawr College) に留学先を変更するようにすすめたのである。このアメリカ人について、詳細はわからない。ただ満喜子は、他人の親切のおかげで導かれたと回想するのみである。

プリンモアカレッジ入学前に、プリンモアカレッジ予備学校で三年間、英語、幾何、代数、地理、歴史、フランス語、ラテン語などを学ぶこととなる。

プリンモアカレッジは、一八八五年フィラデルフィアにクエーカー派の人々により設立された大学であり、女子英学塾（現在の津田塾大学）創立者の津田梅子や恵泉女学園創立者の河井道も学んでいる。

予備学校在学中、満喜子は一九一〇年十二月四日にプリンモアのプレスバイテリアン教会 (Bryn Mawr Presbyterian Church) でジョージア・ジョンストン (Georgia Johnston) から洗礼を受けている。

また寮での生活は、その後の人生に大きな影響を与えるものとなった。例えば、障害をもつ友人との出会いにより、彼らへの社会に存在する人道的態度、障害者自身が障害を克服することのできる人間の無限の可能性を知った。

生涯の友となる脳性小児麻痺のフロレンス・マッキントッシュ (Florence McIntosh) をはじめとして、聴覚障害などをもつ友人への援助をおこなった。その方法は、たんに彼女らの生活や勉強を手取り足取り助けるというものではなく、彼女たち自身で何事もおこなえるよう自立を支援するものであった。

長年、日本で英語を学んできた満喜子ではあったが、アメリカ英語のスラングや生活様式には初めて体験することもあったようだ。留学中のエピソードとして、次のような笑い話が残さ

れている。

ある日、ボルチモア近くの海岸を満喜子が一人で歩き、お腹が減りランチカウンターに行ったときのこと、店員にホットドッグ (hot dog) をすすめられ、満喜子は犬なんか食べないと怒って帰ってきたという。また、ライ麦パン (rye) をすすめられたときは、家畜のえさなんか食べないと怒ったという。

さて、長期にわたる留学生活は有意義ではあったが一向に結婚しようと思わず、迷惑の外れた日本の家族は早く帰国させたかったようである。度々帰国するよう諭す手紙が日本から届いていたようであるが、満喜子は仕送りを断り、独立した生計で勉強を続けようとフィラデルフィアの女性団体から女学生のための奨学金を受け、プリンモアカレッジへ入学した。

氏名は不明であるが、この奨学金制度の創立者であり満喜子が申請した当時の給付者選定委員会委員長の祖母は、一八九三年に来日しており、満喜子の母栄子と旧知の仲であった。そのため、大学進学後も満喜子を家に招いては、満喜子の支えとなっていた。

奨学金によりはじまったプリンモアカレッジでの生活であるが、二年のとき生牡蠣を食べたことにより腸チフスにかかり半年近くを病床で過ごすこととなる。また期待を高まらせていた学問についても、十八、十九歳という大きく年の離れた学生達と机を並べることになじめず、また物足りなさを感じていたようだ。

長い病院での生活、また心から打ち込むことの出来ない学びのなかで奨学金を受けることはできないと、満喜子は給付を辞退してしまう。それにより、奨学金なしではアメリカで生活ができないと思ひ悩む満喜子であったが、見舞いに訪れたアリス・ベーコン (Alice Mabel Bacon: 以下、ベーコン) のすすめにより、大学を中退しベーコンの事業を支えることとなった。

ベーコンは、ニューヘイブンの会衆派教会の牧師であり、エール大学神学部の教授でもあったレオナルド・ベーコン (Leonard Bacon) の娘であり、父レオナルドの影響を受け黒人教育に生涯を捧げた教育者である。彼女は、レオナルドが森有礼の依頼により受け入れ、ともに暮らした日本最初の女子留学生である山川捨松との交流から、一八八一年以降、華族女学校、東京女子師範学校、女子英学塾の英語教師として度々来日している。そして、満喜子は女学校時代にベーコンから英語を学んでいた。

自分のことは満喜子が一番よく知っているから、彼女に遺産の処理を頼む⁽¹⁴⁾

ベーコンは自分の死後の、遺産処理を任せるほど、満喜子に信頼と愛情を寄せていたのだろう。

ベーコンは満喜子を養女にしている。なぜ養女となったのか詳しい経緯は不明である。また、のちに述べるが満喜子がメレ

ルと結婚したときは日本国籍であったことから、日本国内に限
定すれば正式な手続きは取られていないことになる。通常、養
子関係が成立すれば、旧司法省など関係機関に届け出る必要が
あるからである。

さらに、アメリカ連邦政府に公式書類が残されているか、わ
からない。というのも、手続きの書類は連邦政府が一元管理し
ているのではなく、各プライマリーコートに委ねられている。
また全米のどこのプライマリーコートに提出してもよいため、
調査はほぼ不可能といえる。

百人の男女の客と、三十人余の黒人の学校教師のアルバイ
ト労働者を相手に全くデモクラティックな社会をつくる興
味深い仕事⁽¹⁵⁾

ペーコンのもとでは、サマーキャンプなどの事業や家庭生活
を助ける毎日を過ごすこととなる。その仕事は、小遣い程度の
収入しかならないものであったが、満喜子にとってデモクラテ
ィックな社会を作る興味深い仕事であったようだ。

同時に、ペーコンの手伝いをするあいだ、エール大学神学部
の聴講生として、キリスト教への理解を深めていった。

IV メレルとの出会い

渡米後、八年がたった一九一七年十月、満喜子は「厳父老衰
帰国されたし」との報に接した。

たとえ、その人格は尊敬しにくくても、親は、ただ一人し
かない。その人の最後は見送るべきだ。ぜひ帰れ⁽¹⁶⁾

この頃はペーコンも健康を危ぶんでいた時期であり、また末
徳との確執もあり、満喜子は帰国をためらっていた。しかし、
ペーコンのすすめもあり、ふたたびアメリカに戻るとの約束の
もと、帰国した。

末徳の晩年は、一九二二年に亡くなるまでのあいだ、明石の
邸宅で安静を要する生活を送ることになるのだが、帰国した頃
の末徳の容体、また家族との再会などについて満喜子は何も語
っていない。

日本に帰るよう招かれたのは、神の摂理で、ここには終生
の伴侶として私を待っていた人があったのです⁽¹⁷⁾

唯一語るののは、メレルとの出会いである。

当時、メレルは満喜子の兄恵三の邸宅設計を請け負っていた。
メレル三十九歳、満喜子三十四歳であった。満喜子とメレルの



津田梅子（中央）と満喜子（右）：『教育のこころみ』

出会は、廣岡家がアメリカ合衆国駐日大使ローランド・モリス（Roland Morris）を招待した夕食の席上であった。満喜子は兄恵三から通訳兼邸宅設計のアドバイザーを依頼されていた。

はまさに適任者だと思います。彼女が日本で受けた教育は、梅よりレベルが高いので、梅より優れた仕事ができるのではないのでしょうか。どうかあなたからも彼女を説得してみて下さい⁽¹⁸⁾

一九一八年二月十七日付のこの手紙は、山川捨松からベーコンにだされたものである。

この頃、津田梅子は健康がすぐれず後継者を探していた。

満喜子は、西郷隆盛の従弟であり日露戦争時の満州軍総司令官であった大山巖夫人となった山川捨松や海軍大将瓜生外吉夫人となった永井繁子らにより津田梅子に推薦され、塾長候補として女子英学塾に招聘されようとしていた。そして、その説得を山川捨松はベーコンに頼んだのだ。だが、満喜子は辞して受諾しなかった。その理由は、すぐにでもベーコンのもとへと、渡米する決意、そして二度と日本に帰らぬ決意があったからである。もし受諾していれば、二代目塾長には、星野あいではなく満喜子が就任していたかもしれない。

そんな満喜子との出会いはメレルにとつて、よほど運命的なものであったに違いない。

私は彼女の完全な英語に感心したわけではなく、また彼女の人格に興味を覚えたわけでもなかった⁽¹⁹⁾

また、ベーコンが満喜子に帰国をすすめたのは、末徳の件以外にも理由がある。

一柳さんは素晴らしい女性で、しかも有能な方という印象を受けました。私達は彼女が日本に帰ってきた時には、梅の仕事を受け継いでくれたらと願っています。

アリス、梅の病気のことは御存知だと思います。梅はもう以前のように仕事をするには無理だと思えます。梅の代わりのできるような人、少なくとも私たちが頼みたいような人はまだみつかっていません。私の考えでは、一柳さん

メレルが結婚に対して直接語っている言葉からは、満喜子の何に惹かれたのかわからない。神の導きによって結婚したと言わんばかりだ。

しかし、多くの宣教師が結婚することにより、その仕事で中断させられている状況から、結婚をしないほうが仕事を貫くことができる、友人たちに宣言していた矢先の結婚の決心だった。メレルが満喜子に惹かれたのは間違いない。

そんな突然ともいえる結婚への思いを、メレルは満喜子に書いた最初の手紙でつづり、プロポーズをしている。その手紙を受け取った満喜子は、メレルからのプロポーズには驚かなかつたという。

結婚は肉体だけの問題ではなく、二人の人の総人格のかわる問題であることを考えねばなりません。目に見えるもの、手につかめる富、世にあらわれるもの、社会的地位、これらは、過ぎ去るもの、無くなるものです。無くならないもの²⁰によって結ばれば、その結合は永久不変でありました。

「婚約者へのおすすめ」と題して、『湖畔の声』一九六三年十一月号に満喜子は、自分の経験をもとに結婚に際しての重大な問題は、外見よりも中身だと助言している。そのような相手は、第三者が骨を折っても、当事者がいくら結婚したいと願っても、

まとまらないときはまとまらず、またいくら破談にさせようとしてもまとまるときはまとまるとして、「縁は異なるもの」と語っている。満喜子にも、メレルとの出会いは運命的なものだけに違いない。

だが、メレルとの結婚は容易なものではなかった。長く満喜子を放任していた一柳家ではあったが、しかし満喜子は子爵令嬢であり、異国の人であるメレルとの結婚は社会的にも理解されるものではなかった。華族出身の者が外国人と結婚をしたという前例がなかったからである。

正確にいえばいくつかの事例はあった。早い時期には、万里小路秀麿がいる。彼は、一八七一年にロシアに留学し、一八八二年に帰国、華族に列せられているが、帰国に際して、親密であったロシア人女性をともない結婚している。しかし、これは五爵制が制定される以前の事例である。

五爵制成立以後としては、三好太郎がいる。彼は、アメリカ留学中の一八八九年にイギリス人女性と結婚したが、帰国後に三好家を廃嫡されている。

これらは男性の場合であり、女性が外国人と結婚した事例はない。また、男性の場合であっても、廃嫡または爵位返上という処置がとられている。外国人との結婚が、何らかの法律によって禁じられているわけではないものの、外国人との結婚が社会的に認められず、好意的に見られなかったことがわかるだろう。

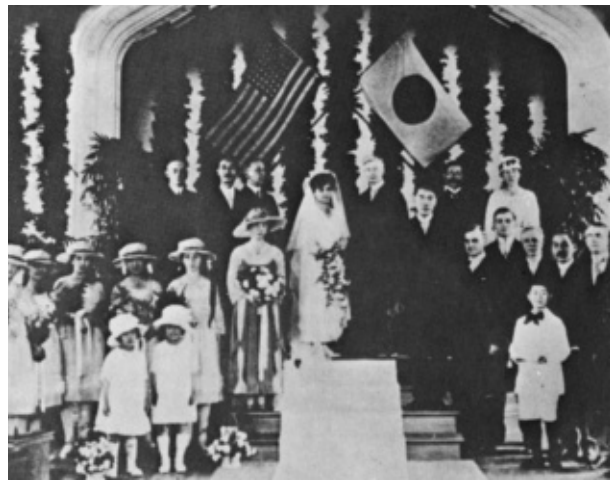
家族のすべてが結婚に反対した。それは、満喜子のよき理解者である兄恵三も同じであり、もつとも強く反対したのは義姉のかめ子であった。そして、メレルの家族も反対した。そのため満喜子は、家族のことを考え一度は結婚を断った。しかしその反面、婚期が遅れていた娘が、やっと三十四歳になり結婚を決意したのである。この機会を捨てさせることも家族にとつては、忍び難いことであったようだ、満喜子は回想している。

幸い、キリスト教に深い信仰をもち、メレルをよく知る兄恵三の義母、浅子が満喜子とメレルの結婚に理解を示すようになっていた。その浅子の助けを待って、旧宮内省で皇族・華族の事務を担当する宗秩寮の許可を受け、実家の子爵一柳家から分家し、平民一柳満喜子として自由の立場となり、結婚することが可能となった。この記録は、現在宮内庁には残されていない。

華族女学校への不参加の許可願、そしてこの平民戸主となった記録が宮内庁に現存していない理由として、宮内庁書陵部によると、関東大震災で消失した可能性、また華族出身者として好ましくない行動であったため、意図的に処分もしくは書類が作成されなかったのではないかとということである。

なお、これが先例となったか不明であるが、男爵徳川厚の長女である喜久子もまた、自由恋愛のすえ平民の男性と結婚するため、一九二三年に徳川家より分家し平民戸主となっている。

さて、浅子の助けがあったにもかかわらず、すぐに結婚するにはいたらなかった。ベーコンからの、生死を分ける手術を前



満喜子結婚式：「教育のこころみ」

に助力を求め
る手紙が、満
喜子のもとに
届いたからで
ある。

一九一八年
四月、満喜子
はすぐさまア
メリカへと旅
立った。この
ときメレルは、
横浜まで満喜
子を見送って
いる。だが満

喜子は、存命中のベーコンの姿を再び眼にすることはできなかつた。五月一日、故郷ニューヘイブンの病院で腸疾患のためなくなった。ベーコンのもとへ向かう途中のサンフランシスコに着く五日前であり、そこで満喜子は訃報を受けた。ベーコンの死に立ち会うことはできなかつたが、満喜子はベーコンの死後の遺産処理などをおこなない、半年後に帰国した。

満喜子の結婚式は、一九一九年六月三日午後二時、メレル自身の設計による東京で最も長いアイルをもつ明治学院のチャペルにおいて、日米の国旗が掲揚されるなか、近江兄弟社の伝道

者であり同志社大学の総寮長兼宗教主任であった武田猪平の司式のもとに執りおこなわれた。これは、過去に例がない華族と外国人との結婚に対して、余計なうわさを封じるために東京で例がないほどの立派な結婚式にしようという一柳家と廣岡家の希望であったという。

満喜子の結婚式には、徳川頼貞をはじめ一柳家、廣岡家、三井家の関係者が数百名列席したといわれているが、父末徳は病が重く、明石の邸宅から赴くことができなかった。しかしながら、末徳は満喜子の結婚を喜び、祝福して満喜子にヒスイとダイヤモンドで作られたネックレスを贈っている。

披露宴は、麻布の廣岡邸でおこなわれた。新婚旅行先は、廣岡家が所有する別荘（二ノ岡荘）のある軽井沢であった。その後、軽井沢は満喜子とメレルの毎年七月末から九月までの避暑地となり、メレルの最も好む土地となった。

V 近江八幡での暮らし

メレルの妻としての生活は、新婚旅行から帰った滋賀県蒲生郡八幡町（現在の近江八幡市）以下、近江八幡で一九一九年六月二十六日にはじまった。

満喜子にとってそこの生活は、近江八幡の人々の話す江州弁も農村地帯の習慣も不慣れなものであった。

たまたま町で、私の姿をみると、一つ手前の角から曲がって、私に会わないようにする人さえありました⁽²⁾

近江八幡の人々にとっても、満喜子となじみあうことは難しかった。満喜子の関東弁のはっきりとした口調は紋切り口上のきびしさに、また率直さは威張った態度として受けとられた。飼犬さえも、いじめられた。買物に出かけても、満喜子と近江八幡の人々のあいだでは、方言やアクセントの違いによりなかなか会話ができず、満喜子の関東弁の発音を聞き返さずにするのは、子どもくらいであったという。また、当時の近江八幡は湿地帯の農村で衛生環境も悪く、住まいも汚く、ネズミや害虫のあふれる場所であった。

近江八幡での生活を、滋賀県立商業学校の教員としてスタートさせたメレルとは異なり、知人もなく親しむ者がなかった。そのようななかから、満喜子は近江八幡の人々とよい関係をつくるためには、お互い理解することだと考えた。自宅を開放し生活を通じて人々と理解しあうことを思いついたのである。これは、メレルが商業学校に赴任し、自宅を学生クラブの場として、かつ学生への伝道の場合（バイブルクラス）としたことに似ている。

すべてをその人の成長のために必要なことに使ってもら

ためとし、また家事は教材である⁽²²⁾

満喜子は六人の少女たちを招き、自宅を家政教育の場として提供した。そして、料理や掃除といった家政は、尊敬され、また科学的に扱われるべきであることを教えた。

山川菊栄は、水戸藩の娘教育について、嫁入り前に武家屋敷に見習奉公にいき、言葉遣いや行儀作法などを仕込まれることが往々にしてあり、そのため山間のさびれた農家の庭先からきれいな東京弁が聞かれることも珍しくなかったと回想しているが、満喜子の実践は関東の娘教育の慣例を下敷きにしたものである。

また、この自宅開放は満喜子と近江八幡の人々との交流のためだけではなく、生活環境が劣悪だった近江八幡やそこに住む人々の行動や意識を変える目的もあったと考えられる。

のちに、この実践は近江兄弟社での二十四時間訓練という教育プログラムにつながり、さらにその後設立される女学校での生徒たちを五く六人のグループに分け、学校に泊り込み、自分たちで買い出し、料理、掃除などをおこなう生活訓練へと継承された。

さて、新婚当時にふりかえって満喜子は、近江兄弟社への感想を次のように述べている。

わたしは近江兄弟社（当時の近江ミッション）を、これま

で見たことはありましたが、来る気にはなれなかった⁽²³⁾

なぜ、来る気になれなかったのか。満喜子はその理由について、何も語っていない。新婚早々の不慣れな土地での生活への、あるいはメレルの両親との同居への不安なのかは、わからない。ただ、結婚間もない大正中期の近江兄弟社は、メレルの建築家としての仕事、結核治療をおこなう近江療養院（サナトリウム、現在のヴォーリス記念病院）、そして伝道に関する事業が中心であり、満喜子の関わる余地はなかった。

だが、生来の行動力が、満喜子を次第に近江兄弟社の事業へと参加させるようになる。

軒下でおやつを食べながら何するともなくたたずんでいる子どもたちに建設的な遊び場を作る必要を感じた⁽²⁴⁾

一九二〇年三月、満喜子と満喜子のもとに集まった六人の少女たちにより、学校の放課後に集まる子どもを対象に、池田町五丁目の自宅一室と近江兄弟社の空き地を利用して建設的遊び場の提供と生活指導がはじまった。

子どものための教育事業、「プレイグラウンド」である。

当初は、満喜子の小遣いや持ち物を現金にかえてはじめた小規模なものであった。

しかし、次第に近江兄弟社の若い社員たちがプレイグラウン



1920年ごろのプレイグラウンド：『教育のこころみ』



初期の清友園園舎：『教育のこころみ』

ド事業に参加し、クラブ活動として雑誌部、木工部、読書部、英語部、料理部、絵画部などの活動が開始され、団体生活の訓練として児童会が組織され、子どもたち自身による会議、会食、パーティーなどが計画されるようになるなど、プレイグラウンドは拡大していった。

このプレイグラウンドでは、特に子どもたちへの衛生指導が重視された。これは、湿地帯の農村であった近江八幡の衛生状況、また保護者たちが田畑の仕事で子どもたちの生活習慣にまで気配りがおよぶことがなく、子どもたちが不衛生な場に置かれていたことを、満喜子が危惧したからである。

良い成人を造るためには、幼い子どもにも、良い教育を与えらるよりほかにないと存知ます。そのためには、良い母親を作らねばなりません。良い母親は良い娘さんを必要といたします⁽²⁵⁾

そして、衛生教育は子どもたちだけではなく、プレイグラウンドに来る子どもたちの母親に対してもおこなわれた。

多くの時間を、定期的に子どもたちと捧げたいとの願いから、自宅とは別に池田町五丁目に家屋を買い求め使用することにした。

一九二二年七月二日に新園舎の開園式がおこなわれた。内容は不明であるが、このとき神戸頌栄幼稚園教師の和久山キノによる講演がおこなわれている。この園舎では、毎週月木土の夜に、山田寅之助の指導による柔道教室が開催された。

一九二二年六月三十日、滋賀県に幼稚園設置許可願を提出し、八月二十三日に二年保育をおこなう認可幼稚園として清友園幼稚園が設立された。九月十四日に認可幼稚園として開園式がおこなわれ、最初の園児である四名が入園した。

初期プレイグラウンドも清友園と命名されていたのだが、その名称が引き継がれたのである。これは、清友園のなかの幼稚園ということで清友園

幼稚園（以下、清友園）とよばれた。

清友園の命名は、武田猪平によるものである。保育者には、加藤ふじ、富永操、山田寅之助夫妻をはじめとする、満喜子が自宅を開放した家政教育の場に集まっていた女性たちを中心としてその役を担った。

さて、清友園が誕生した翌年の一九二三年九月一日に関東大震災が起こった。満喜子はそれを例年の避暑先である軽井沢の廣岡家の別荘で経験した。このとき、汽車の不通などにより満喜子とメルルは例年のように近江八幡に帰ることができなかつた。

しかしメルルはそのあいだにも、建築家としての関心と彼の事務所であるヴォーリス建築事務所東京出張所の被災状況を探るため、ひとり東京に赴いた。

メルルが被災した東京に出かけているあいだ、満喜子は、その期間は不明であるが、避暑先で足止めされ、学校へ行くことのできない子どもたちのために、同じく任地に戻れずにいたアメリカ人宣教師たちと一緒に英語学校をはじめていた。

VI 近江兄弟社での教育事業

満喜子のもとに集まる女性や近江兄弟社の若い社員たちの協力により、歩み始めた幼稚園であったが、しかし満喜子は、従

来の幼児教育の方法には満足できず、かつて自分が姪たちにおこなった新しい幼児の生活の仕方を清友園で実践したいと考えた。

新しい幼児の生活の仕方とは、何事も自分のことは自分でするという自主の教育である。満喜子は姪たちへの実践を通じて、子どもたちのもつ自発力の偉大さを学んでいた。

満喜子の生家である一柳家には多くの女中がおり、家族の身の回りの世話をしていた。

徳川慶喜の孫である徳川幹子は、化粧をするときでさえも世話係が目光らせていたことを回想しているが、華族家をはじめとする上層社会の子どもたちは、ほとんど何も自らする必要がなかった。

廣岡家でも子どもたち一人ひとりに世話係がついていた。服の着替えから全て、子どもたち自身は何もしなくても世話係がしていたのだろう。満喜子はそれを廃し、子どもたちができることは子どもたちにやらせるよう試みたのである。

栄子亡きあと、満喜子は家中の絹物の縫い替えや、妹の勉強をみていたという。それに対して、周りが手を差し出さなければ何もしなかったであろう姉妹たち。そんな彼女たちをみていたことが、独立自主の重要性を満喜子に感じさせたのかもしれない。

満喜子は自身の幼児教育方法の教育学的裏づけを得るため、一九二九年に渡米した。そして、清友園の保育の助けをおこな

い、一九二七年より三年間、ルーシー・ウイローック (Lucy Wheelock) がボストンに設立したウイローック保育学校 (Wheelock's School for Kindergartners) の保育士養成プログラムに参加していた浪川岩次郎の妹かつ(後の中村穰夫人)とともに、アメリカにおける幼児教育研究を視察してまわった。浪川岩次郎は幼年の頃、水口教会の日曜学校でメレルの話を聞いたことがあり、一九歳のときメレルにすすめられ近江兄弟社に入社した人物である。

浪川かつの留学費用は、満喜子がブリンモアカレッジ予備学校時代に、ともに生活をした小児麻痺をわずらっていたフロレンス・マッキントッシュから奨学金として寄付されたものである。

ニューヨークの National Child Health Association や National Hygiene Association などをはじめとして、ワシントン (The Child Research Center) やイェールのギゼル博士の教育実験所を訪問視察しました。又 Lincoln School¹⁾ Horacemon School (ジョン・デューイ博士の教育法の実験学校で、コロンビア大学学芸学部に属する学校) を視察見学し、この間に、コロンビア大学学芸部部の夏期大学にも席を置いて受講しました。又、Perkins Institute に盲人教育の実際をみ、黒人教育の殿堂といわれている Hampton Institute をも視察しました。その他、デトロイトにある

Nursery School の Merrill Palmer School も見ました²⁶⁾

National Child Health Association とは、ニューヨークにある子どもの健康に関する機関である。

National Hygiene Association とは、National Hygiene Association の誤りであり、ニューヨークにある公衆衛生に関する機関である。

Child Research Center とは、一九二八年に広域ワシントン D.C. 地区を対象に、ロックフェラー財団の援助を受けて設立された、就学前教育を支援するための機関である。

Lincoln School は同名を冠する学校が多数あり、満喜子がどの学校を訪問したかは不明である。

Horacemon School とは Horacemann School の誤りであり、コロンビア大学学芸部付属として一八八七年に設立された、ジョン・デューイ (John Dewey) の教育方法の実験学校である。Perkins Institute とは、ボストンにあるジョン・フィッシャー (John Dix Fisher) により一八二九年に設立された視覚障害者教育施設である。自立支援のための教育カリキュラムが用意され、アレクサンダー・ベル (Alexander Graham Bell) のすすめによりヘレン・ケラー (Helen Keller) も学んだ。

Hampton Institute は、現在の Hampton University の前身であり、アメリカ南北戦争後の一八六八年に黒人教育施設としてサミュエル・アームストロング (Samuel Chapman Arm-

strong)により設立された。Hampton Instituteの初期から黒人教育に携わっていた一人が、ベーコンであった。

Merrill-Palmer Schoolとは、一九二〇年に設立されたデトロイトにあるWayne State Universityの付属機関である。ここでは、家庭生活と人間発達に関する研究がおこなわれ、Nursery Schoolとよばれる保育園でもある。

アメリカ滞在中、アイダ・ハイド (Aida Hyde : メンソレータムの創始者Alberta Alexander Hyde夫人) より、三万ドルとグラントピアノの寄付を受けた。その資金により、近江八幡東部の市井町に保育室、昼寝部屋、台所、トイレを備えた園舎を建築することができ、一九三一年、幼児教育の場を池田町五丁目の狭い日本家屋から、明るく、清潔で、美しく、落ち着きのある新園舎へと移した。

なお、アルバータ・ハイド自身は、一九一〇年頃より、東アジアにおけるメンソレータムの製造販売の近江兄弟社への代理権委任、近江兄弟社所有になる琵琶湖周回伝道船ガリヤ丸の寄贈など、メレルの事業を支援し続けている。

一九二九年十一月十三日にアメリカでの視察を終えて満喜子は帰国した。

同年十二月三日には、満喜子は帰国報告会をかねて八幡キリスト教会で滋賀県内の幼稚園関係者三十五名を招待して滋賀県保育大会を開催し、アメリカでの研究成果を紹介した。

幼稚園の三才児組では、共通の遊び道具、共通の部屋、共通の時間に共通な動作をする（おねんね、食事、おいのり）、これにらんで自治の練習をさせる、姿勢運動、手のわざ、遊戯、歌、ゲーム、食事のたべ方、その他、日常生活、四才児組では、環境を少し広めて、自分および自分と共通の環境を持つ遊び相手の他に、もつと広く幼稚園全体という環境を自覚させ、国とか他の国とかの話を、だんだんして、少しずつ大きい人類世界の観念に進める準備とします。自然科学も、この点において同じ効果があると思います。五才児組では、現在の状態で、まだまだ訓練を多く要するばかりでなく、わがままの角もかたくなっていると思われまふ。しかし、それと同時に、精神的に何物かが育っていると思われますから、そこに力をかりて、大いに社会良心を育てて行き、国に対して真の愛国の念を育て、そのためには個人生活に余裕があり、ひろびろとした、良い気持ちを持つことができ、隣人に対する寛容な親切をする人となるように、しむけるのがよいと思ひます⁽²⁷⁾

幼児教育の指針として、満喜子は「わがままにならない程度の自己中心」「自己統制力」をあげた。しかしながら、このように子どもたちを教育するためには、豊かな経験のある保育者や設備が不足していた。

指導者たるべき保母達が、未だ知的にも、精神的にも、生理的にも、理性と情緒の調和せる真の自由の生活の体験を持たず、又之に対する自発的興味をさえもたぬ⁽²⁸⁾

清友園での教育の困難さの理由に、保育者への教育不足を挙げている。満喜子にとって教育者は、知的にも、精神的にも、生理的にも、理性と情緒の調和せる真の自由の生活の体験と、これに対する自発的興味をもつ必要があり、そのような教育者を養成しなくてはならなかった。そのため、当初は四年保育を計画していたものの、まずは幼児六十名を迎え、三年保育からスタートさせた。

一九三九年三月一三日、近江兄弟社内に兄弟社女子教育準備委員会が設立された。この委員会では、近江兄弟社教育研究所が立案され、一九三九年四月二日に中村穰を主事に設立された、近江兄弟社教育研究所は、その前身として清友園教育研究所があり、指導者としての保育士や研究生の養成を目的に三年制の幼児教育専攻部が設置されていた。最初の修了生は西川はま子ら二名であった。同所は、社会情勢などの影響により一九四三年三月に閉鎖された。

研究所の教育目的は、「創造力と自給力を有するクリスチャンの養成」であり、その方針は「子女の個性生活及び社会における発育の過程を助けるため実社会に直面する経験

を与える独立独尊、奉仕の生活の根本なる自己統制力の訓練機会を与える」とあります⁽²⁹⁾

近江兄弟社教育研究所の目的は、文化の発展や創造に寄与する人物の養成であった。

幼児教育専攻部の目的には、「世に奉仕せんとする希望を所持しめ奉仕に必要な心身及頭脳の力を与える」とあり⁽³⁰⁾

幼児教育専攻部では、実生活に即した人間教育の場の提供として、清友園幼稚園を幼児教育の実習場として、また近江兄弟社の園芸家畜部と洋裁部を労作教育の実習場として活動をおこなった。

さて、幼稚園での教育は、健康であることという消極的な健康観ではなく、与えられた自己の生命を活発に生かすことのできる身体を育てることが保育の目標の一つとされたのである。

人間は心、頭、体の三方面を持っていて、これがよく均衡のとれた発達をし、相ともに働く事によって、所謂、全人の成長を見ることができ⁽³¹⁾

この教育観は、満喜子自身の体が弱かったこともあるが、満喜子がアメリカ滞在中にアメリカの友人たちの自立を助けた経

験がその根底にあるとともに、近江兄弟社社員⁽¹⁾の西川仲二の姉たちである昌子やま子との出会いも少なからず影響している。西川昌子は、京都の女学校卒業後に受けた先天性股関節脱臼の手術後の悪化から足が不自由となり、その妹の西川はま子は耳が不自由であった。この姉妹との出会いは、満喜子が三十七歳の時である。

よくみる眼、よく聞く耳、よく工夫する頭、よく心に従う頭、よく心と頭に従う手足⁽²⁾

自分を全面的に生かして使う能力と自己統制力の訓練をしながら、キリストに従う人々を育てることを目標としていた。そのため、「既成の玩具を与えず、子どもたち自身の工夫・創造を促す材料を与えること」「自分のことは自分でする自主性の養育」「生理生活・日々の排泄習慣の習得や定期的な身体測定により人間構造を知ること」などがおこなわれた。

ここで、清友園以外の近江兄弟社の教育事業について、簡単にみておきたい。

現在の中学校、高等学校の前身として近江勤労女学校（以下、勤労女学校）が設立され、一九三三年四月四日に、新入生十六名を迎えた。勤労女学校設立の主唱者は、満喜子ではなくメレルの教え子、近江兄弟社の創立者の一人である吉田悦蔵であり、最初の校長に就任した。

吉田悦蔵は、メンソレータム製造工場（現在の株式会社近江兄弟社）で働いている女性のために、学課と労作をおこなう教育の場が必要と考えていた。この勤労女学校は、労作教育を重んじたドイツの教育者ケルシエンシュタイナー（Georg Kerschensteiner）の労作学校に倣って設立された。一クラス十六人の五年制であった。午前は学課、午後はメンソレータム包装の紙折の労作がおこなわれた。

この労作では、一九三六年から新入生のための制服の縫製、一九四〇年には多賀農園での蕎麦時き、近江兄弟社図書館の図書整理などもおこなわれるようになった。

一九四一年六月からは、従来からおこなわれていた深清水や荒川での一ヶ月にわたる農繁期託児所奉仕活動を実習としておこなうなど、戦時中であっても教育が続けられた。

勤労女学校は、従業員教育を目的として設置されたのではなく、正規の学校教育の場として考えられていた。しかしながら、設立当初は公認の学校教育としての資格を得ることはできなかった。

勤労女学校は、工場の従業員教育と間違われることもあり、一九三五年一月二十六日に近江兄弟社女学校（以下、女学校）と改称された。一九三八年三月十九日に第一回の卒業式がおこなわれ、卒業生は十一名であった。この年の四月には西元町に寄宿舎ができ、七名の生徒が入舎した。

一九四三年十二月十四日には、専門学校入学者規定による高

等女学校の卒業と同等の資格をもち四年制となった。一九四五年三月十一日には、看護婦学校として指定を受け二十名が入学し、五年制となった。一九四七年に女学校は新制へと移行した。従業員教育の場としては、勤労女学校と同じく吉田悦蔵により、メンソレータム製造工場の包装部で働く約五十名の女子従業員への教育を目的として、一九三三年五月五日に向上学園が設立された。園長には佐藤安太郎が就任した。

女子従業員たちを四組に分け、毎日午後一時から三時まで各一時間の学課を学ばせ、土曜日には家政、洋裁、茶の湯が教えられた。九月の時点で生徒総数は五十五名であり、十二歳から四十八歳の者が在籍した。

作業時間中或ハソノ前後ヲ問ハズ、各自ノ日々直面スル生活ノ体験ノ総テヲ通ジテ生活即教育ヲ標榜³³

一九四二年の『向上学園一覽』に学園の目的が記されている。また、満喜子による設立ではなかったものの、満喜子の、将来女性に参政権が与えられたとき、正しく判断できる準備としての教育が必要であるとの考えが反映されていた。

向上学園は、工場との語呂合わせにより命名されたのだが、一九三四年にメンソレータム女子従業員教育と改称し、一九三七年にふたたび向上学園、戦時中の一九四四年には女子青年学校と改称された。敗戦後の翌年、一九四六年五月に満喜子が校

長に就任した。そして、一九四八年四月の新制近江兄弟社高等学校の設立とともに、その定時制部となった。しかし、一九七四年の株式会社近江兄弟社の倒産にともない、一九七八年に最後の卒業生七名をもって、廃止された。

なお、株式会社近江兄弟社の倒産により、メンソレータムの製造販売の代理権がメンソレータム社に返上され、日本における代理権はロート製薬株式会社へと移った。

現在では、メンソレータム社はロート製薬株式会社のグループ企業となっている。また、代理権の返上後の株式会社近江兄弟社は、残ったメンソレータムの製造設備を利用し、主原料や効能はメンソレータムとはほぼ同じメントラムを製造販売している。

衛生環境が整っていなかった大林地区への幼稚園分園事業として、「大林子供の家」が一九三五年四月に大林公衆浴場の階上で、保健衛生を主とした幼児を対象とする生活訓練教育がはじまった。一九三六年の四月には、活動の場を大林から慈恩寺町に移し、一九三九年からは清友園と統合された。

また隣保館が一九三六年十一月に、乳幼児の保護や保健衛生の強化を主とした幼児の生活訓練と母親への教育、青少年教化などを目的に開設された。これらの責任者は、満喜子であった。八幡英語学校がメレルにより一九〇七年、八幡基督教青年会館内に設立された。五年制で英語、一年制で珠算が教えられた。一九二六年二月からは、八日市（現在の東近江市）にあった八

日市飛行艇隊の將校向けの英語教授を担った。これは、一九四二年三月に株式会社近江兄弟社に引き継がれるまで続いた。

一九三三年に、悦蔵の妻である清野により近江家政塾が設立された。これは、清野がはじめた料理講習会が前身であり、次第に習字、手芸、刺繍、編物、造花、人形作りなどを講習するようになり、一種の花嫁学校として発展したものである。

清野は、一八八八年に宮城県で生まれ、仙台市東二番町の日本基督教教会牧師丹羽金十郎の紹介で東京芝のフレンド女学校（現在の普通女学園）で学んでいる。

フレンド女学校は、一八八七年に内村鑑三と新渡戸稻造の助言により、フィラデルフィアのフレンド派に属する婦人伝道会の人々によって女子教育を目的として設立された。校名の「普通連土」は、津田梅子の父仙によって「普く世界の土地に連なる」ようにと命名されたものである。

清野は近江家政塾のほかにも、一九二三年四月十一日に米原紫苑会館に開設された付属の紫苑幼稚園の初代園長に就任している。この幼稚園は、満喜子の手によるものではなく近江基督教慈善教化財団による設立である。

近江基督教慈善教化財団とは、一九一〇年六月にメルル、吉田悦蔵、村田幸一郎の三人が中心となって設立されたキリスト教の伝道とその伝道者の養成を目的とする近江基督教伝道団を前身に、一九一八年三月八日に設立認可された財団法人である。

基督教主義ヲ以テ慈善救済ヲナシ且ツ各人ノ靈性知識身体ノ修養を奨励シ、殊ニ衛生思想ヲ普及スル³⁴

その設立目的をみると、教会を中心とする伝道と近江療養院による医療が中心事業であったことがわかる。近江基督教伝道団は、基督教近江伝道団とも近江ミッションともよばれていた。近江基督教慈善教化財団が設立した付属幼稚園は米原だけではなく、堅田基督教教会館、今津基督教教会館にもあり、八日市には託児所が設けられている。

従来、近江八幡には図書館がなかったが、一九四〇年十二月十一日に近江兄弟社図書館が教会建物を利用して設立された。これは吉田悦蔵の、広く書物を集めるのではなく特定の作家の全書を集める文庫形態の図書館を設立したいという願いに基づき設立された。設立当初は、馬場孤蝶の遺した著書を収蔵すべく交渉がおこなわれていたが、これは最終的に慶應義塾に収蔵された。

一九四一年五月に、日本図書館協会の支部となり、滋賀県図書館協会創立総会が近江兄弟社図書館で開催された。同年九月には巡回図書館事業を開始し、戦時中においても開館を続けていた。

蔵書数は記録の残る一九四六年二月で、約一万冊であったとされるが、一九六六年には四万冊となり、利用登録者数も総人口の六割にあたる二千六百人を超えていた。近江兄弟社図書館

は初代館長に吉田悦蔵が就任し、一九七五年まで私立として運営され続けた。だが、近江兄弟社の財政困難から近江八幡市に全てが寄贈され、市立として運営されるようになる。

近江兄弟社では、数日間の期間限定で社会教育事業がいくつもおこなわれた。

一九二九年には湖畔国民高等学校が開かれ、外国思想を同志社大学講師清水安三、昆虫学を京都帝国大学教授湯浅八郎、住宅問題をメレル、家政学を満喜子が担当するなどして開設された。また、一九三三年から同じく期間限定で、学生基督教青年会冬期学校がメレル、吉田悦蔵、斎藤惣一、ランバス女学院院長田中貞らを講師に開会された。また、近江農村青年学校が賀川豊彦、メレル、満喜子、高橋虔らを中心に三月三日から十二日まで開会された。

第一回から第二回までの近江農村青年学校は男性のみを対象としていたが、第三回からは女子部が設けられ、満喜子とその責を担った。

湖畔国民高等学校と近江農村青年学校は近江八幡でおこなわれたが、このほか琵琶湖湖畔の、野田、能登川、八日市、信楽、海老江、堅田、今津などの各地で農業指導と伝道をかねた近江農民福音学校が、メレル、吉田悦蔵、賀川豊彦らを講師として一九三一年から開催された。

堅田には江西義塾が、夜間学校として一九三〇年七月七日に開設され、二年制で英語、数学、国語が教えられた。一九三六

年には二十名の在籍生がいた。

戦後は、一九四七年四月に新学制に基づいて近江兄弟社小学校、近江兄弟社中学校、一九四八年には高等学校が開設され、女学校は廃止した。満喜子がそれぞれの校長に就任し、これで幼稚園、小学校、中学校、高等学校の総合学園体制が整い、すべてに満喜子が責任を負う立場となった。

教育に軍閥の干渉が厳しくなって、この幼稚園も二回陸軍中将の訪問を受けました。群集心理をかりたてその使用を図ろうとする当時の軍部の思想からは個性尊重の教育は道はずれであると断定され⁽³⁵⁾

一時は順調に発展しているように思われた教育の実践であったが、戦争の激化とともに、軍による教育への干渉を受けたといわれている。

満喜子は、軍部の思想からは道はずれとされたキリスト教の「真理を追究し、実践せよ」の教えによる精神的健康を育てることを目標に、個性を尊重し、愛と祈りによるキリスト教教育をおこなっていたため、また一九四一年に帰化するものの、アメリカ人であったメレルにはスパイの容疑などがかけられ、メレルや満喜子は何度も危機的な状況に陥つたのだという。

そのような状況を救ったのは、満喜子の兄である。

一九四二年十一月十八日、大正天皇の子であり、昭和天皇の

弟であった高松宮宣仁親王が公式に近江兄弟社と一柳邸を訪問している。また前年の一九四一年十二月十八日には、宮内省を通じて近江兄弟社に御下賜金が渡されている。

満喜子の兄であり、末徳にかわって一柳家の家督を相続した剛が大正天皇の学友であったため、一柳家は皇室と関係が深かった。満喜子自身は、高松宮宣仁親王とは直接面識はなかったらしい。

その甲斐あつてか、満喜子やメレルは軍や警察に拘束されるという事態は免れた。

今回新学園の誕生と共に道を後進に譲り、今後とも指導員の養成に協力くださることになり³⁶

しかしながら一九四二年二月、教育事業が統合され近江兄弟社学園と称し、満喜子は近江兄弟社での教育事業の責任を解かれ、檜山嘉蔵が担った。

メレルは、一九四一年一月二十四日に日本に帰化し、帰化とともに一柳米来留と名乗った。

なぜ、メレルは帰化したのか。

近江兄弟社の発展とともに、永住の意思が固まったのであることは間違いない。だが、満喜子との結婚も理由の一つである。

一九一九年六月三日の結婚式の前日、満喜子はアメリカ総領

事館で婚姻の法的手続きを済ませたという。これによりメレルの妻となった満喜子は、当時の国籍法により日本国籍を離れアメリカ国籍を獲得するはずであった。しかしながら、法律上の問題とも満喜子が東洋人であることをアメリカが嫌ったためともいわれるが、メレルとともに日本に在住し続けるかぎり、アメリカ国籍を獲得することができないことになった。そのため満喜子は、無国籍の状態となったのである。この満喜子に生じた戸籍上の問題が、メレルの帰化を決心した理由の一つといわれている。

この満喜子の国籍に関するやり取りは、法務省やアメリカ連邦政府には保管されていない。

一九四二年から戦争が終結するまでのあいだ、近江兄弟社より生活費の送金はあったものの、満喜子はメレルや彼の父母とともに、避暑地の軽井沢から近江八幡へ戻ることは許されなかった。一九四二年五月号の『湖畔の声』に、満喜子が後進に道を譲ったとあるが、事実上の軟禁である。

清友園も、一九四五年三月二十六日に一般保育が停止、四月から戦時保育所となり幼児部と乳児部になった。

軽井沢に幽閉されているあいだメレルは、京都帝国大学講師、同志社大学講師、東京帝国大学講師となるなど、戦争中の四年間は大学講師となつて過ごした。

満喜子は東京からの疎開者が軽井沢に増えるに連れ、近江兄弟社の軽井沢オフィスを開放し、小学一年生から高等女学校四



1965年頃の満喜子：『教育のこころみ』

年生までを対象とする独学自営の学校を開設し、子どもたちに教育の機会を提供した。これはのちに、啓明学園に移管されることになる。

啓明学園は、三井高維が私邸を開放して、帰国子女教育のために創立した学校である。啓明学園に移管された背景には、啓明学園の子どもたちが東京から軽井沢に疎開したことがある。

啓明学園理事長平野吉三にこの件について、二〇〇七年五月に電話で取材をおこなった。

終戦後に何度か拝島の啓明学園を満喜子が訪問した記録は、啓明学園に残っています。しかしながら、どのような経緯

で移管されたのかはわかりません。啓明学園には移管そのものの記録はないのです。

おそらくは、満喜子が教育をおこなっていた子どもたちが、集団疎開

してきた啓明学園に合流したのが、移管の真相だと思われる。移管されたのちには、満喜子は高等女学校の生徒を相手に、その実習の場として生後一年八ヶ月から四歳未満を対象とする託児所を開設している。

さらに、軽井沢基督合同教会付属幼稚園として一九一六年に設立された軽井沢幼稚園の園長として、教育に携わった。

軽井沢幼稚園は、メソジスト教会宣教師ダニエル・ノルマン(Daniel Norman)により軽井沢の繁忙期に地元商店街や避暑客の家庭の幼児を対象に夏だけ開設され、一九二七年には通年制に移行している。

満喜子が軽井沢幼稚園に携わった背景には、軽井沢幼稚園の園舎がメルルによる設計であったこと、またダニエル・ノルマンとの交流がある。

残念なことに一九四〇年以降の軽井沢幼稚園の卒園児童名簿は現存するものの、園長名は記載されていない。満喜子と軽井沢幼稚園の関係を示す史料として、写真が現存しているだけである。

ダニエル・ノルマンは一九四〇年十二月二十日、カナダに引き揚げることになるのだが、これを受けて、満喜子はダニエル・ノルマンに代わり園長を務めた。

このように、近江兄弟社での教育の責任を解かれた戦時中であつても、満喜子は軽井沢で教育事業をやめることはなかった。戦争終結の一九四五年八月十五日を、満喜子は軽井沢で迎え

た。しかし、メレルが病床にあったため、すぐに近江八幡に戻ることはできなかった。近江八幡に戻るのには、三ヶ月後の十一月十七日である。

そのあいだ、満喜子は軽井沢で教育事業を続けた。そして、一九四五年九月三日には、同じく軽井沢に疎開していた大正天皇の後であった貞明皇后が、満喜子のもとを大量の菓子や布地を携えて訪問している。貞明皇后は、一九二四年十二月に同志社女学校を訪問し、キリスト教の礼拝に参加し賛美歌を歌うなどしており、キリスト教的な自由教育に関心があったらしい。

また病床のメレルのもとへは、終戦から一ヶ月もたない九月六日に近衛文麿よりの使者である外務省の井川忠雄が訪れている。

これにより、メレルはダグラス・マッカーサー (Douglas MacArthur) との秘密交渉の任にあたることとなるのである。具体的には、日本政府とGHQ (General Headquarters) の仲介役である。メレルは、九月十日にGHQのサミュエル・バートレット (Samuel Bartlett Jr.) を仲介として、横浜のニューグランドホテルでダグラス・マッカーサーに近衛文麿の伝言を伝え、九月十二日には天皇の人間宣言の草案起草に関わったといわれている。

このサミュエル・バートレットの父サミュエル・バートレット (Samuel Bartlett) は、戦前に同志社大学で教鞭をとっており、メレルとも親交があった。この井川忠雄訪問にはじまる一

連のGHQとの交渉について、メレルは「メレル・ノート」ともいべきメモを残しており、財団法人近江兄弟社に現存している。

ようやく近江八幡に戻った満喜子は、十二月二十四日に開催された近江兄弟社の全体会議において、ふたたび教育事業の全責任を担う立場に戻った。そして、新教育の方針を浪川かつ、高橋輝尾らとともに決めた。

教師が教えるのではなく、引き出すという意味で、生徒各自の自発的、自主的な勉強を促す方法⁽³⁷⁾

これは、たんなる教育方針だけではなく、教師の立場も表明している。すなわち、教師が子どものように位置する絶対的な支配者としてではなく、子どもに奉仕する者としての存在の表明である。そして子ども自身の自主・自活を育てることを目的とした。

近江兄弟社での教育事業の再出発に取り組んでいるさなか、満喜子はいくつかの要請を受けている。

S C A P (Supreme Commander for the Allied Powers) から、日本の新しい学校教科書をつくる委員への就任要請があり、滋賀県からは国会議員となるために立候補の要請を受けていた。だが満喜子は、どちらも断っている。満喜子は自分の仕事を、何かの要職につくことにより教育を指図するのではなく、近江

兄弟社での実践を通じて子どもたちを育てることにあると考えていたからである。

政界に、実業界に、宗教界に、そのほか全ての方面を通じて、その現実を静かに分析してみると、人間共通の弱点が、しみじみと見いだされます。これを補いたいと思う心から生まれた人間教育の理想が、幼稚園教育の目的であります⁽³⁸⁾。うらやみ、闘争、誘惑。それらに打ち勝つために、自己を統制していく力を養わなければならない。

三つ子時代は、模倣の時代で、環境から潜在精神に受ける印象が、その教育となり、この印象は、子どもの一生を通じて、消えないものであります。これが善であるならば、成功、幸福の原動力となり、これが悪ければ、不成功、不幸の種になります⁽³⁹⁾。

ジョン・ロック (John Locke) は、人間の精神ははじめ白紙のようなもので、そこに様々な観念を構成するのが教育であるとする白紙説を唱えたが、満喜子もその立場にあるといっているだろう。一日も早く、正しい教育を受けさせなくてはならないと、満喜子は、「三つ子の魂百まで」という言葉により幼児教育を重視した。

幼稚園では、自省と自制の力および心身の自発動作をうながす環境を造り、これを指導せんと試みる⁽⁴⁰⁾。

どんな子どもでも家庭では我が先立ち、あやまった周囲の大人の手本や躰で無邪気な自己中心がわがままになってしまいうため、できるかぎり集団環境を与え、人のため社会のために自己を統制するように育てなければならないという。その環境が幼稚園なのである。

すくすくと幼児期を脱して、少年期に進まれるのであります。少年期も、つかのま、やがて青春期へと成人されるのであります。幼年期は少年期をはぐくみ、少年期は青春期を生むのであります⁽⁴¹⁾。

満喜子によって幼児から青年にいたるまでの近江兄弟社学園の基礎が確立された。ただ、満喜子は近江兄弟社での教育事業に大学にいたるまでの発展をみていたようであるが、それについては、今日においても未だ達成されていない。

この大学設立が実現できなかった理由は、メレルによる反対があったためという説がある。なぜ設立できなかったのか。

二〇〇七年六月に満喜子が名付け親となり、満喜子に学びともに働いた経験のある近江兄弟社学園史編纂委員会委員の辻友

子に、この件について取材をした。

メレル先生が反対したなんて話は聞いたことがありません。大学がつくれなかった理由は、財政的な問題からでしょう

大学設立を可能とする財政的基盤がなかったという。

一九一〇年十二月、メレル、吉田悦蔵、コーネル大学海外宣
教学生奉仕団出身のレスター・チェーピン (Lester Grover
Chapin) は、共同出資で、ヴォーリズ合名会社を設立した。主
な業務は、建築設計監理である。メレルの設計事務所は、一九
〇八年一〇月に京都基督教青年会館が新築されて以来、そのな
かにヴォーリズ建築事務所を開設していたが、法的という意味
ではヴォーリズ合名会社が最初の組織になる。

一九二〇年十二月十五日、ヴォーリズ合名会社を解散し、新
たに近江セールズ株式会社が設立された。この会社では、アメ
リカからの建材やピアノなどの輸入、そしてメンソレータムの
製造と販売がおこなわれた。

利益の大部分を近江基督教慈善教化財団に贈与する⁽⁴⁾

定款第二条で明確に、利益が近江基督教慈善教化財団に贈与
されることが示されている。

この財団に対して、一九二九年を例に寄付状況を見ると、利

益が約六百九十三万八千円なのに対し、財団寄付は約六百四十
三万八千円となっている。いわば、近江セールズ株式会社が近
江兄弟社全体の資金源となっていたのである。

なお、メレルの設計事務所であるヴォーリズ建築事務所は、
ヴォーリズ合名会社の解散とともに一時独立し、ふたたび一九
三七年に近江セールズ株式会社の一事業部門となり、一九四二
年に一柳建築事務所に改称、一九六一年に一粒社ヴォーリズ建
築設計事務所として独立する。また、近江セールズ株式会社は
一九四三年の企業整備令により日本メンソレータム株式会社、
一九四六年に株式会社近江兄弟社と社名変更をおこなっている。

このような寄付行為がなぜ可能だったのか、非常に興味深い。
理由の一つとして、発行株式の七十五パーセント以上をメレル
らが所有していたことも考えられるが、企業経営における運営
資金の面からみた場合、満喜子の兄恵三の養父である廣岡信五
郎が一八八八年に大阪土佐堀に合資会社として設立した加島銀
行が、近江セールズ株式会社の取引銀行であったことが、大き
な理由の一つである。自己資本を上回る経営資金が加島銀行か
ら融資されていたらしい。

メレルの建築設計も、大同生命ビルをはじめとする建築事業
が廣岡財閥を中心とする依頼により成功していることから、近
江兄弟社の事業は、直接間接を問わず満喜子の兄恵三の支えが
あったのだろう。

一九三九年十一月に刊行された『湖畔の声』に所収の「昭和

一三年度近江基督教慈善教化財団事業並びに決算報告」をみると、今津、米原、堅田、水口、野田、木之本、鳥居本、能登川、愛知川、安土、高宮の基督教会館、信楽、深清水、仁保の伝道所の維持管理やそこでの宗教教育、託児、学術文化講演会の開催、近江兄弟社女学校、近江家政塾、清友園幼稚園、清友園プレイングラウンド、八幡英語学校、近江療養院をはじめとする各事業を行っていた近江基督教慈善教化財団の収入の三分の一以上が寄付金となっている。

一九四一年五月号の『湖畔の声』に記されている当該年度の財団事業予算は、清友園、女学校、近江兄弟社教育研究所などの教育事業に約三万五千元、米原、水口、堅田、今津の教会館とその付属幼稚園、図書館などの社会事業に約三万円、近江療養院の医療事業に約十二万円、財団の諸経費に三万円が計上されており、株式会社からの寄付金が収入の五割におよんでいる。しかしながら、加島銀行の廃業や支援者の減少などに関連し経営が悪化する。近江基督教慈善教化財団の所有していた教会館などの不動産も、一九四〇年四月一日の宗教団体法による伝道活動の近江八幡組合基督教会への委譲、また滋賀県からの要請で一九四二年に米原基督教会館を米原町に寄付するなど、近江兄弟社の動産不動産資産は減少していった。

なお、メレルや満喜子の晩年から企業業績が悪化し、一九七四年に株式会社近江兄弟社は負債額三十七億三千四百万円をもって倒産したが、この処理には近江兄弟社が経営していた安土

などにあつた農場などの不動産の大半があてられた。

すなわち、初期近江兄弟社が所有していた不動産、建築設計やメンソレータムが生み出していた資金は次第に減少し、大学設立のための敷地や財政的基盤がなかったのだ。

そして、ここに近江兄弟社の教育事業である近江兄弟学園の設立を満喜子からメレルによるものにしようとする意図がある。

近江兄弟社の事業は大きく分けて、株式会社などの産業部門、幼稚園などの教育事業部門、伝道や病院などの社会事業部門に大別される。

社会事業部門のうち伝道に関する事業が近江八幡組合基督教会へ委譲され、メレルが来日して開いたバイブルクラスが発展し、滋賀県商業学校基督教青年会、そして八幡基督教青年会として活動を続けた近江八幡YMCAは一九四七年九月七日に日本YMCA同盟に加入し、それぞれ近江兄弟社から独立した。そして、教育事業、社会事業部門の経済的基盤となっていた産業部門の倒産である。

これにともない、社会事業部門の各法人は、法人として別組織であるという形式的な独立だけではなく、独自の財政基盤、経営方針による実質的な独立を余儀なくされ、近江兄弟社は解体していった。その後、株式会社近江兄弟社の経営再建などにより、一九八〇年以降、ふたたび財団法人近江兄弟社を中心として近江兄弟社の再建と各法人の統合がすすめられた。そのと

き、近江兄弟社全体の象徴がメレルであった。

近江兄弟社グループ事業体の名称変更の流れに伴い、学園においても、法人名には「近江兄弟社」を、校名には「ヴォーリズ」の名を冠したい⁽⁴³⁾

教育事業のみが満喜子による設立では、「近江兄弟社グループ」の形成において問題があった。

ヴォーリズと結婚した一柳満喜子は、ヴォーリズ(44)の精神に共感し、その信仰に基づく教育事業に着手した⁽⁴⁴⁾

そのため、満喜子による創立であるにもかかわらず、ヴォーリズ精神という名目でのメレルによる創立というかたちがとられたのであろう。

VII 満喜子の人柄

満喜子とともに近江兄弟社で働いていた浦谷道三は、満喜子を次のように評している。

信仰の人、意志の人、教育の鬼、英会話の達人⁽⁴⁵⁾

教育のために自らに鞭打ち、また悩みや過ちを告白してくる者とともに涙を流す人であったという。

気のつき過ぎる人、まねごとの嫌いな人、遠くの山や空を眺める人の好きな人、賛美歌を歌うことの好きな人、のり巻き、おかき、甘いものの好きな人⁽⁴⁶⁾

さらに浦谷道三によれば、はつきり物を言うこと、創意工夫をすること、なんでも能力いっぱいにすること、きちんとした服装、よい音楽をきくこと、積極的に物を考えること、言うだけでなく実行すること、人の話を熱心にきくこと、禁酒、禁煙、間違いをすぐあやまること、礼拝をまもること、自主独立の精神、正直であからさまなこと、いつも整理整頓されていること、子どもと遊ぶこと、教育について話すこと、何事も徹底してやることを好み、相手の目をみて話さないこと、言うだけで実行しないこと、はつきり物を言わないこと、時間を守らないこと、後始末をしないこと、隠し事をする事、飲酒、喫煙、不潔な身なり、うわさを信ずること、無作法なこと、姿勢の悪いこと、物を大切にしないこと、食事のマナーの悪いこと、話を静かにきかないこと、日曜日に買物をする事、けじめのない男女交際、返事の不明瞭なことを嫌ったという。

浦谷道三自身は、「部屋のなかで洗濯物を干すのは恰好が悪

いからやめなさい」としかられたと回想している。

満喜子の金銭観を知ることができる話に、次のようなものがある。結婚に際し、メレルと満喜子にこんなやりとりがあった。

前年の末日、すべての支払いをした後、金は、いくらあったと思う、三十人の青年を養うのだ⁽⁴⁷⁾

このメレルの質問に対して、満喜子が百円か二百円か三百円かとだんだんと値段を上げて回答していったものの、その答えは二円六十七銭であった。これは、メレルが固有財産をもたず、財産のための貯蓄をしないという生活方針をもっていたことを、満喜子に伝えたものであろう。

しかしながら、満喜子は借金だけは決してすることがないようにと、万が一に備えて銀行に密かに預金していたという。なぜならメレルには、汽車の食堂で食事をした後に、お金がないことに気付いたり、滞在が延びて宿泊しなければならなくなつたとき、宿泊費がなかったり、そもそも帰りの汽車賃がないということが度々あったからである。

飲酒喫煙は満喜子が嫌つたのみならず、近江兄弟社の入社式では禁酒禁煙を宣誓させ、また滋賀県内の各地で禁酒禁煙講演会を開催するほどに、メレルも嫌つた。

満喜子とメレルが、一九四七年六月十日に京都御所にて昭和天皇に謁見したときのことである。近江兄弟社での教育実践な

どについて語り、帰路に就こうとしたところ、漆塗りの箱に入った煙草を土産としてもらった。しかしながら、満喜子は中身をみてすかさず、感謝の言葉と同時に「煙草は時間もお金も浪費するだけであり、我が家では吸わない」と受け取らなかつたらしい。これには、さすがのメレルも驚いたというが、満喜子のピューリタニズム的なキリスト教信仰がよくあらわれている一例であらう。

明るいやかな階段があつて、ある日、私は急いで走つて二段ずつとび上がっていったのです。するとそのときに丁度、満喜子先生が上がつてこられて、私の走っているのを見て、すぐに注意されました。「一段ずつお上がりなさい」私はハイと返事をしましたが、満喜子先生は、じつとそこに立つておられ、私がり直すのを待ってみておられた⁽⁴⁸⁾

満喜子について、近江兄弟社の関係者や近江八幡の人々に取材をおこなうと、満喜子は礼儀にうるさかつたという話をよく聞く。満喜子の厳しさは老若男女を問わなかつた。

満喜子の近隣に住む前川夫人が、満喜子にすれ違いの挨拶をしたときのことである。満喜子は、挨拶を返す前に前川夫人を呼び止め、「挨拶は自転車に乗りながらするものではなく、ちゃんと立ち止まってするものですよ」と諭したという。

この厳しさは、満喜子の子爵令嬢としての立場と重なり、時に近江八幡の人々にとっては、権威的に受け止められることも少なくなかった。そして、これが近江八幡に来た頃の近江八幡の人々とのあいだの壁となったのであろう。

満喜子に学び、ともに働いていた山脇芳美に、二〇〇六年九月に取材したところ、掃除についての話がきけた。

子どもたちが園舎や校舎の掃除をするとき、叩きによる掃除はほこりが舞い散るため許されませんでした。子どもたちが満喜子先生の目を盗み、畑木を使ったときには決まらず、足音を立てずに近づき、白いハンカチで窓枠をぬぐって、「山脇さん、まだほこりがあるわよ」と叱られました。

子どもたちを諭すとき、間違いを訂正させるだけではなく、なぜそのようにするのか理由をしっかりと説明した。

靴を脱ぐときもただ揃えるのではなく、あとで履き易いようにと少し隙間を空けて並べることなども、子どもたちを見つけては話しておられました

だからといって、厳しいだけではなかった。どうしても、箸の持ち方が正しくできない子どもには、強制するのではなく、それ相応にできればよいと話したという。

校舎の端の女子寮に住み、朝は暗いうちに起きて全館の窓開け、玄関や廊下・トイレなどの掃除をします。それが終わると窓を閉め、冬はストーブもつけて回ります。生徒さんたちが登校したときに気持ちよく感じられるようにとの配慮からでした⁽⁴⁹⁾

戦後、家庭科の教師として満喜子のそばにいた丸山直子は當時を回想し、子どもたち一人ひとりを大切に、わが子のように愛情を注いでいた満喜子の姿を語っている。

さて、満喜子に対して生家の一柳家の人々はどのように思っていたのだろうか。一柳末徳の孫である一柳末幸の長女、一柳由美子に対して書面で二〇〇六年九月に取材をしたところ、次のような回答をもらった。

なにぶん小中学生のころですので大人の会話に入っていたわけではなく話の断片を覚えていく程度です。いつも焼きを食べに案内してくれたこと、叱られたこと、日曜日の夕食がいつもビーフシチューだったこと、幼稚園や学校、サナトリウムなどを車で案内してもらったこと、ヴォーリズの両親の話や、自分の父親母親、または腹違いの姉妹のこと、など耳にはさみましたが



撮影年月不明：『教育のこころみ』

すき焼きは、満喜子にとって客をもてなす料理だったのだろう。高松宮宣仁親王が一柳家を訪れたときも、満喜子はすき焼きを振る舞っている。このとき高松宮は、すき焼きをつくっているのが、まさか華族出身の満喜子だとは思わず、家中に満喜子を捜してまわったといわれている。

満喜子の料理については、山脇芳美も次のような話をしてくれた。

満喜子先生の家で週末うかがうと、決まってコッペパンとホワイトシチューでした

どうやら満喜子のつくる料理は大人数をもてなすことが可能な、シチューの類が多かったようである。それは、満喜子の料理が、ベーコンのもとキャンプの手伝いをしていた頃に培ったものだからではないだろうか。

さて、不仲だったといわれる満喜子と末徳

の関係についても、一柳由美子は語ってくれた。

結婚後から亡くなるまでの当家との関係については、行き来はありました。私も両親に連れられて近江八幡のお婆の家には時々遊びにいきましたし、又お婆が我家に泊まりに来たこともありました

末徳との確執はあったと思われるが、一柳家との交流は続いていたようである。しかしながら、末徳と満喜子とのあいだの確執は、末徳が亡くなってからも解けることはなかったといわれている。

VIII 最後まで教育者

満喜子は、亡くなる二日前まで教壇にたち、夫メレルと同じ部屋でなくなった。その瞬間まで、満喜子は教育者であった。教育への熱意は近江兄弟社で学ぶ子どもたちだけに注がれたものではない。満喜子にとって教育とは、民主主義に対応する子どもを育てることであった。

満喜子は一九二五年六月十五日に、ハワイで開催される第一回太平洋会議に日本代表として参加するため渡米した。十五日はちょうど、十日間続いた兄恵三の大同生命ビルディング新築

披露パーティーの最終日であった。

太平洋会議とは、世界学生キリスト教連盟の総主事でありノール平和賞を受賞したジョン・モット (John Raleigh Mott) により提唱された、第一次世界大戦後に太平洋沿岸各国及び同地域に利害をもつ国々の知的交流・理解促進を目指したYMCAによる会議である。一九二五年の第一回会議から一九五八年の第十三回会議にいたるまでほぼ隔年で開催された。第一回会議には、日本からは斎藤惣一や沢柳政太郎をはじめとする十九人が参加している。

メレルとジョン・モットは、以前からお互いを知っていた。それは、メレルがコロラド大学在学中の一九〇二年一月に参加した学生義勇団の大会にまでさかのぼる。メレルはこの大会で講演したジョン・モットに感銘を受け、外国伝道を志した。

ジョン・モットはメレルだけではなく一九一三年の悦蔵の訪米以来、彼とも親交を深め、一九三七年三月七日には近江兄弟社を訪問している。

メレルによれば、この会議での満喜子のスピーチは、アメリカの雑誌『Outlook』に掲載されるほど、公正で国際的な意見であったという。しかし、満喜子のスピーチは太平洋会議には公式に記録されていない。また、正式な日本代表出席者であったにもかかわらず、ハワイ大学に所蔵されている関係公式資料にも満喜子の名前をみつけることはできない。

太平洋会議に詳しい早稲田大学大学院山岡道男教授に、この

件について二〇〇七年三月に電話で取材した。

満喜子のスピーチは会議内のもではなく、滞在中に行われたハワイ市民に向けたスピーチであったかもしれない。しかし、満喜子自身が正式な参加者として太平洋会議へ参加していること、またその生涯にわたり文章をあまり残していない満喜子の性格から考えると、たんにスピーチ原稿が残されていないだけではないかと考えられる。

だが、メレルとジョン・モットとの親交を考えると、ジョン・モットはメレルを参加させたかったものの、メレルがアメリカ人であり日本側から参加させることが出来なかったため、名目上は満喜子を正式な参加者とし、メレルを付添い人の形にして参加させたのではないかという疑問が生じるが、メレルについても公式記録には一切発言記録が残っておらず、真相は不明である。

なお、雑誌『Outlook』については、雑誌の特定と所在について現在調査中であり、太平洋会議での満喜子のスピーチ内容については、今後、詳細に報告したい。

さて、この太平洋会議の参加に合わせて、満喜子はアメリカ本土に渡り、近江兄弟社の支援者たちを訪問し、さらにはイギリスにも立ち寄っている。イギリスにはコロムビア蓄音機会社のイギリス支配人、ジェームス・シールズ (James Allen

Shields) が近江兄弟社の代表を務めるなど、イギリスにおいても近江兄弟社の支援者たちが多く存在したからである。

イギリスではロンドン、リバプール、マンチェスターなどを訪問したとされるが、特にマンチェスターには近江兄弟社の支援者の一人として綿花取引所の仲買人がいた縁もあり、マンチェスターの綿花取引所を訪問している。そして満喜子は、特別会員として扱われ、歴史上初めて立会場に立った女性となった。そして、ロンドンでは英国放送協会 (BBC) を通じて、イギリスの女性たちにメッセージを送ったといわれている。

満喜子はメレルとともに、何度も欧米へかけている。これは、アメリカやイギリスなどに近江兄弟社の支援者がいたことも関係しているのだが、主に寄付を募ることが旅の目的であった。

寄付者に対してメレルは、事業報告書としての英文広報誌『*The Mustard Seed*』を不定期ではあるが送付している。

また満喜子は一九二七年の教育視察以降も、ダルトン案の実験学校やフランシス・パーカーの学校などを視察するために渡米している。

ダルトン案の実験学校とは、Dalton School のことであり、ヘレン・パーカーズト (Helen Parkhurst) が考案した学校の社会化と学習の個性化をねらい自由と協力に基づく指導をおこなうシカゴにある学校である。

フランシス・パーカーの学校とは、Parker School のことであ

り、ヨハン・ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi)、ヨハン・ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart) らの思想を学び、ジョン・デューイですら多くの点で学ぶべきところがあるといわしめたフランシス・パーカー (Francis Wayland Parker) の後継者により、一九〇一年にシカゴ大学の付属小学校として、直観教育、単元学習、合科教授等を実践する児童中心主義教育に基づく実験学校として設立されている。

なお、満喜子の海外渡航歴について法務省入国管理局に照会したところ、一九七三年四月以前の日本国民の渡航記録を入国管理局では保存していなかった。

また外務省外交資料館には、一九〇九年の初渡米に際して六月七日付の、また一九一八年四月に再渡米するに際して三月九日付の、満喜子の旅券取得の記録が残されていたが、それ以降の記録はなかった。これは、メレルとの結婚による国籍の移動と関係しているのかは不明であるが、いずれにしろ正確な満喜子の海外渡航歴を調査することはできなかった。

さて、戦後は近江兄弟社での教育事業に専念していた満喜子であるが、一九四六年より二年のあいだ滋賀県教育委員、一九四七年には滋賀県青少年防犯協会女子部長、一九五二年より二年のあいだ近江八幡市教育委員を務めるなど、近江兄弟社だけではなく、広く公立学校などに対しても影響を与えることになった。

一九四七年五月には自主行為試験会を開催し、滋賀県下の中

学校長や教員を集め、近江兄弟社における教育活動を利用して、授業研究が行われた。また、同年七月には滋賀県からの要請で、高等学校の教員を目指す中学校教員の夏期講習会を開催している。

このほか、一九六六年九月二十一日に幼稚園教育九十年記念滋賀大会で「幼稚園事業に携わって四十四年の思い出」と題し講演するなど、様々な場で幼児教育の重要性について講演している。

毎日を子どもたちに囲まれた生活として過ごしていたものの、純潔の生活を貫いた満喜子には、自身の子どもがなかった。

血を分けた赤ん坊をもつ光栄をもたなかった妻は、老いたる姑のおむつのおかげで、おむつの世話ができるのをよろこび、一日の仕事を終えた後の、真夜中の洗濯をたのしみ⁵⁰ました

自分の子どもをもつことがなかったことを、孫を抱くことのできなかった義父ジョン・ヴォーリス (John Vorles) に対して申し訳なく思っていたという。

満喜子には九十人の子どもがいる。もし、満喜子に子どもが生まれれば彼らへの時間が減ってしまう。私は満喜子のすべての子どもたちと暮らせて幸せだった⁵¹

ジョン・ヴォーリスは幼稚園をはじめとする近江兄弟社学園に通う子どもたち全てが、満喜子の子だと語ったという。

満喜子はメレルの生前、一時心停止となったことがある。幸い、心臓はふたたび鼓動し、生き返った満喜子であったが、その満喜子の看病をしたのは、東京の聖路加国際病院で看護師をしていた満喜子の「子ども」の一人であった。

満喜子の生涯は、多くの近江兄弟社員に見守られながら、一九六九年九月七日、日曜日の午前一時に八十五歳で終わった。満喜子は、長年の教育上の功勞から、一九五九年と一九六六年に文部大臣表彰、一九六三年に藍綬褒章、一九六五年に勲四等瑞宝章、一九六九年に従五位に叙されている。

IX おわりに

メレルや近江兄弟社の事業には子爵令嬢としての満喜子の人脈が、大きな支えとなっていた。

建築家メレルへの設計依頼、また近江兄弟社の事業への経済的支援は、満喜子の兄恵三の養子先である廣岡家が大きく関わっている。

また、戦時中という局面においては、皇室との関わりが近江兄弟社の事業活動の破綻を回避させることの裏打ちとなってい

る。近江兄弟社への御下賜金、高松宮宣仁親王の公式訪問、貞明皇后の訪問、昭和天皇との謁見など、これらは満喜子の兄剛との関係によるものだった。

戦後においても近江兄弟社と皇室との関係は続く。一九四七年七月、皇太子（現在の天皇）の家庭教師であったエリザベス・ヴァイニング（Elizabeth Grey Vining）が軽井沢の別荘で皇太子とその弟正仁親王を招いて夕食会を開催したとき、満喜子とメルルも同席している。

また、一九五九年には結核予防会総裁であった秩父宮がサナトリウムを、一九六一年に近江兄弟社を会場として開催された日本キリスト教史学会には三笠宮が会員として参加するなどしている。

ちなみに、今上天皇と皇后の出会いの場として知られる「軽井沢会テニスコートクラブハウス」はメルルの一九三〇年の作品である。

満喜子自身は近江兄弟社学園をはじめとして、いくつかの教育事業をおこなった。

この理想は、私が考えついたものではありません。上よりいただいたものです。この仕事は私がしてきたものではありません。ただ導きによって育ててきたのです⁽⁵²⁾

クリスチャンであった満喜子にふさわしく、神により与え導

かれるままに教育事業をおこなったという意味である。

永年悩み多い青年男女の友として、又多くの問題をもたれる親の相談相手として、これの根本的な解決への祈りにみちびかれて、御自分のポケットマネーで幼児教育の場、若い女性の育みの本能の科学化の実験場として幼稚園を始められた⁽⁵³⁾

満喜子を教育事業へと導いたきっかけは、子どもたちへの深い関心と愛であったことは間違いない。満喜子の幼児期の生活は父、母、妾、妾の子に囲まれる複雑なものであった。大名から子爵となった一柳家ではむしろ当然であろう妾との生活は、しかし、民主主義が開こうとしていた時代に生まれ、ミッシヨンスクールで学んだ満喜子にとっては、異質なものであったに違いない。そのようななかでも、妾に対しても疎むことなくむしろ教育し、その子どもにも平等に接した母のキリスト教的態度は、満喜子の人生に大きな影響を与えた。そして、満喜子自身の孤独な子ども時代、廣岡家での姪の世話やアメリカ留学時代の体の不自由な友人たちへの支援などを通じての子ども、いや人間の成長の可能性への理解が、満喜子を教育者として、導いたのである。

本研究は、満喜子の生涯を概観したにすぎない。だがそれは、満喜子の教育方針・活動とその意義を明らかにするだけではな

く、日本教育史、日本キリスト教史における満喜子や近江兄弟社の位置を明らかにする手がかりにもなり得たことだろう。

付記

満喜子に関する文字史料が少ないため、取材対象者と満喜子との関係を明らかにし、取材内容の資料的価値を検討するため、名を記した。

謝辞

本研究は、一柳由美子氏をはじめ、山脇芳美氏、早稲田大学大学院教授山岡道男氏、軽井沢幼稚園事務長出口哲徳氏、啓明学園理事長平野吉三氏、日本YMCA同盟資料室真鍋泉氏、近江兄弟社学園辻友子氏、宮内庁書陵部、法務省大臣官房秘書課情報公開係、大津地方法務局戸籍課、外務省大臣官房総務課情報公開室、外務省外交史料館米内宏幸氏、アメリカ総領事館関西レファレンスセンター、霞会館華族資料係、近江八幡市市史編纂室、近江八幡市立図書館の協力をえた。

また、執筆にあたり高橋虔氏のご子息である国際日本文化研究センターの高橋悠氏からは有益な助言をいただいた。末筆ながら、深く感謝の意を表す。

参考文献

- Fletcher, G.N. *The Bridge of Love*, E.P.Dutton & Co., INC.
一九六七年
- 福尾猛市郎『滋賀県八幡町史』清文堂出版、一九七九年
- 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』近江兄弟社学園、一九七二年
- 近江兄弟社学園新制三期会『忘れられない教育者一柳満喜子先生の思い出「満喜子先生ありがとう」』白峰社、二〇〇六年
- 市村修一『軽井沢幼稚園の生い立ちと歩み』日本キリスト教団軽井沢教会、二〇〇五年
- Ishii, N. 「Constructing Christian Brotherhood: Makiko Hitozuyamagi Vories and Her American Mentors」『第一九回国際宗教学宗教学史会議世界大会』
- 伊藤隆・塩崎弘明『近代日本史料選書5』井川忠雄日米交渉史料』山川出版社、一九八二年
- 岩原侑『足で訪ねた一万軒』近代経営社、一九八七年
- 湖声社『湖畔の声』一九二二年七月—現在（定期刊行物）
- 中島松樹（編）『軽井沢避暑地二〇〇年』図書刊行会、一九八七年
- 沖野岩三郎（編）『吉田悦蔵伝』近江兄弟社、一九四四年
- 沖野岩三郎（編）『吉田悦蔵文集』近江兄弟社、一九四四年
- 奥村直彦『近江八幡教会百年史』日本基督教団近江八幡教会、二〇〇二年
- 奥村直彦「ヴォーリス夫妻の教育思想と「近江ミッション」教

育事業の展開」『キリスト教社会問題研究』四五、一九九六年、六四―九九頁

一 柳米来留『失敗者の自叙伝』近江兄弟社、一九七〇年

一 柳貞吉編『一柳家史紀要』王友社、一九三三年

佐野安仁「一柳満喜子の教育観」『キリスト教社会問題研究』

三〇』同志社大学人文科学研究所、一九八二年、三五五―三七七頁

清水安三『故一柳満喜子夫人をしのびて』未公刊

田中寿美子・山川振作編『山川菊栄集』一〇』岩波書店、一九八一年

YMCA史学会『新編日本YMCA史』日本YMCA同盟、二〇〇三年

吉田悦蔵『近江の兄弟ヴォーリス等』警醒社書店、一九三三年

注

(1) 一柳米来留『失敗者の自叙伝』再版、近江兄弟社、一九八〇年、二七七頁。

(2) 吉田悦蔵『近江の兄弟ヴォーリス等』、警醒社書店、一九三三年、一七一頁。

(3) 池田健夫『近江兄弟社学園同窓会会報神の国』、近江兄弟社学園、二〇〇六年、一頁。

(4) 賀川豊彦『跋』吉田悦蔵『近江の兄弟』、警醒社書店、一九三三年、一一頁。

(5) 賀川豊彦『跋』吉田悦蔵『近江の兄弟』、警醒社書店、一

九三三年、一四頁。

(6) 中村かつ(編)『教育随想』初版、近江兄弟社学園、一九五九年、六三頁。

(7) 中村かつ(編)『教育随想』初版、近江兄弟社学園、一九五九年、六四頁。

(8) 中村かつ(編)『教育随想』初版、近江兄弟社学園、一九五九年、六四頁。

(9) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、一三九頁。

(10) 中村かつ(編)『教育随想』初版、近江兄弟社学園、一九五九年、六五頁。

(11) 中村かつ(編)『教育随想』初版、近江兄弟社学園、一九五九年、六四頁。

(12) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、一三九頁。

(13) 中村かつ(編)『教育随想』初版、近江兄弟社学園、一九五九年、六六頁。

(14) 一柳米来留『失敗者の自叙伝』再版、近江兄弟社、一九八〇年、二七六頁。

(15) 中村かつ(編)『教育随想』初版、近江兄弟社学園、一九五九年、六七頁。

(16) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、四四頁。

(17) 中村かつ(編)『教育随想』初版、近江兄弟社学園、一九

五九年、六八頁。

(18) 久野明子『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松―日本初の女子留学生』、中央公論社、一九八八年、二八二―二八三頁。

(19) 一柳米来留『失敗者の自叙伝…再版』、近江兄弟社、一九八〇年、二七五頁。

(20) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、一三三頁。

(21) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、二九頁。

(22) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、二七頁。

(23) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、二四頁。

(24) 中村かつ(編)『教育随想…初版』、近江兄弟社学園、一九七二年、七〇頁。

(25) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、一〇四頁。

(26) 中村かつ(編)『教育随想…初版』、近江兄弟社学園、一九五九年、七二頁。

(27) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、一一六頁。

(28) 一柳満喜子『湖畔の声…二四二』、湖声社、一九三三年、二六―二七頁。

(29) 中村かつ(編)『教育随想…初版』、近江兄弟社学園、一九

五九年、七九頁。

(30) 中村かつ(編)『教育随想…初版』、近江兄弟社学園、一九五九年、七九頁。

(31) 中村かつ(編)『教育随想…初版』、近江兄弟社学園、一九五九年、七四頁。

(32) 一柳満喜子『湖畔の声』、近江兄弟社、一九六五年、一一頁。

(33) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、二〇三頁。

(34) 奥村直彦『ヴォーリス評伝』、港の人、二〇〇五年、二一九頁。

(35) 中村かつ(編)『教育随想…初版』、近江兄弟社学園、一九五九年、一八頁。

(36) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、二〇一頁。

(37) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、四四頁。

(38) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、二二七頁。

(39) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、一三一頁。

(40) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、一〇八頁。

(41) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄

- 弟社学園、一九七二年、一〇九頁。
- (42) 奥村直彦『ヴォーリス評伝』、港の人、二〇〇五年、一四一頁。
- (43) 近江兄弟社、「近江兄弟社学園二世紀グランドデザイン(第三次案)」「一粒の麦」、近江兄弟社学園、二〇〇七年、七頁。
- (44) 近江兄弟社、「近江兄弟社学園二世紀グランドデザイン(第三次案)」「一粒の麦」、近江兄弟社学園、二〇〇七年、六頁。
- (45) 浦谷道三『忘れられない教育者 一柳満喜子先生』、未公刊、一九八〇年、二頁。
- (46) 浦谷道三『忘れられない教育者 一柳満喜子先生』、未公刊、一九八〇年、二―三頁。
- (47) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、七七頁。
- (48) 近江兄弟社学園新制三期会『忘れられない教育者一柳満喜子先生の思い出「満喜子先生ありがとう」』、白峰社、二〇〇六年、六〇頁。
- (49) 近江兄弟社学園新制三期会『忘れられない教育者一柳満喜子先生の思い出「満喜子先生ありがとう」』、白峰社、二〇〇六年、一五頁。
- (50) 学園五十周年記念文集委員会『教育のこころみ』、近江兄弟社学園、一九七二年、五九頁。
- (51) Fletcher, G.N. *The Bridge of Love*, E.P. Dutton & Co., INC. 一九六七年、一一一頁。
- (52) 中村かつ(編)『教育随想・初版』、近江兄弟社学園、一九五九年、八一頁。
- (53) 中村かつ(編)『教育随想・初版』、近江兄弟社学園、一九五九年、七九頁。

年代	事項
一八八四年	三月一七日・一柳末徳・栄子の長女として東京芝愛宕下(東京都港区西新橋一丁目)に誕生。
一八八九年	ミッション幼稚園に入園。
一八九一年	女子高等師範学校附属小学校に入学。
一八九五年	附属小学校卒業。女子高等師範学校附属女学校に入学。
一九〇一年	附属女学校卒業。女子高等師範学校附属女学校補習科で和裁を学ぶ。
一九〇三年	兄恵三を頼って廣岡家に家庭教師として奉公にでる。
一九〇五年	メレル・ヴォーリズ来日。
一九〇六年	神戸女学院音楽部ピアノ科に入学。
一九〇七年	八幡英語学校の開設。
一九〇八年	神戸女学院音楽部ピアノ科を卒業。日本女子大学校で助手となる。
一九〇九年	アーネスト・クレメント夫人を頼りに渡米。当初、留学先はハワイであったがフィラデルフィアに変更。
一九一〇年	六月・「近江基督教慈善教化財団」設立。 二月・ヴォーリズ合名会社設立。 二月四日・プリンモアの長老派プレスバイテリアン教会で洗礼を受ける。
一九一七年	一〇月・「厳父老衰帰国されたし」との報に接し、帰国。兄恵三邸の建築アドバイザーとしてウイリアム・メレル・ヴォーリズと出会う。
一九一八年	四月・ベーコンより手紙を受け、渡米。ベーコンの死後の整理をおこない、半年後に帰国。
一九一九年	一柳末徳家より分家し、平民戸主となる。 六月三日・メレルと明治学院のチャペルで結婚。

一九二〇年	三月・「フレイグラウンド」開設。 四月・兄恵三・メレルらとともに、建築調査のため渡米。
一九二二年	池田町五丁目空き家を購入。「清友園」と名付け保育事業を開始。
一九二二年	九月一四日・滋賀県の認可幼稚園として「清友園幼稚園」開設(認可は八月二三日)、園長就任。
一九二三年	四月十一日・紫苑幼稚園開設(園長に吉田清野)。 九月一日・関東大震災を軽井沢で経験。軽井沢にいた子どもたちを相手に、アメリカ宣教師達と英語学校を開設。
一九二五年	第一回太平洋会議参加のためハワイへ。後、渡英。BCから放送。
一九二九年	「湖畔国民高等学校」開設(満喜子は家政学を講義)。 五月・幼児教育研究のため渡米(一月一三日・帰国)。 二月・滋賀県保育大会開催。
一九三〇年	二月二九日・メレル、吉田悦蔵らとともに中国にわたる。 七月七日・「江西義塾」開設。
一九三一年	一〇月・アイダ・ハイドよりの寄付をもとに、園舎を市井町に新築し移転。
一九三三年	四月四日・「近江勤労女学校」開設(校長に吉田悦蔵)。 五月五日・「向上学園」の開設。 「学生基督教青年会冬期学校」「近江農村青年学校」開設(近江農村青年学校では第三回以降の女子部の責任者に満喜子)。
一九三四年	二月・「近江ミッション」を「近江兄弟社」に改称。「向上学園」が「メンソレータム女子従業員教育」と改称。
一九三五年	四月・「大林子供の家」開設。一月・近江勤労女学校を「近江兄弟社女学校」と改称。 「近江家政塾」校舎完成。

一九三六年	一月…「隣保館」開設。
一九三七年	女子従業員教育を「向上学園」と改称。 三月七日…ジョン・モットが近江兄弟社を訪問。
一九三八年	九月二十六日…メレルとともに渡米(一九三九年二月三日…帰国)。
一九三九年	三月一三日…近江兄弟社内に関兄弟社女子教育準備委員会を設置、近江兄弟社教育研究所の設立。 四月二一日…近江兄弟社内三年制の「近江兄弟社教育研究所(幼児教育専攻部)」を開設。
一九四〇年	「近江兄弟社図書館」の開設。
一九四一年	一月二四日…メレルの帰化にともない復籍(?)し、ヴォーリス満喜子から一柳満喜子に。 二月一八日…宮内省を通じて御下賜金が近江兄弟社に。
一九四二年	二月二一日…軽井沢幼稚園園長に就任。 二月…清友園幼稚園、幼児教育専攻部、女学校を近江兄弟社学園として統合。 一月一八日…高松宮が近江兄弟社を訪問。戦時体制により、軽井沢に幽閉。
一九四三年	一月一四日…近江兄弟社女学校は専門学校入学者規定による高等女学校の卒業と同等の資格となる。
一九四四年	「向上学園」を「女子青年学校」に改称。
一九四五年	一月一七日…終戦により軽井沢より近江八幡に帰る。 二月二四日…近江兄弟社全体会議出席。 SCAPからの依頼を固辞。
一九四六年	二月…滋賀県教育委員就任(一九四八年まで)。
一九四七年	近江兄弟社女学校を廃止。近江兄弟社小学校・中学校を設立。滋賀県青少年防犯協会女子部長就任、日本赤十字評議員就任。 五月…「自主行為試練会」を開催。 六月一〇日…昭和天皇にメレルとともに謁見。

一九四八年	七月…中学校教員のための夏期講習会を開催。 四月…幼稚園長、小学校、中学校、高等学校校長に就任。同月…近江兄弟社高等学校(全日制共学)を設立。高等学校定時制部は向上高等学校として認可。 五月一五日…メレルの眼科手術のため渡米。
一九五一年	三月…「学校法人近江兄弟社学園」設立、学園長就任。「清友園幼稚園」を「近江兄弟社幼稚園」に改称。
一九五二年	近江八幡市教育委員就任(一九五四年まで)。
一九五四年	メレルとともに渡米、メレルのコロナド大学卒業生のクラス会に参加。
一九五九年	一月七日…教育功労者として文部大臣表彰。
一九六三年	六月三日…教育功労者として藍綬褒章。
一九六四年	五月七日…メレル死去。 七月二一日…近江兄弟社学園理事長就任。 一〇月…渡米。
一九六五年	株式会社近江兄弟社取締役会長就任。教育功労者として勲四等瑞宝章。
一九六六年	財団法人近江兄弟社理事長就任。 九月二一日…滋賀県教育委員会主催の幼稚園教育九十年記念滋賀大会で講演、滋賀県知事より感謝状。 九月二三日…滋賀県教育会館で開催された私立幼稚園教育講習会で講演。
一九六七年	一月一五日…国立教育会館ホールにて、文部省主催の幼稚園教育九十年記念式典で、教育功労者の一人として文部大臣表彰。 四月一一日…名誉学園長に就任、後任は浦谷道三。 一月…文部大臣より幼児教育功労者として表彰。
一九六九年	六月一九日…理事会で任期満了にともない、理事長再任。 七月一四日…担当理事制にともない教育担当。 九月七日…永眠、近江兄弟社葬により「恒春園」に葬る。従五位、勲四等。